

---

# 魔法少女リリカルなのは ～若草色の妖精～

八九寺

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～若草色の妖精～

### 【Nコード】

N2647R

### 【作者名】

八九寺

### 【あらすじ】

故郷の都市の祭事を襲った細菌テロ。

少年の自身にとって大切なものを犠牲にして行った『世界にとっての最善の手段』。

しかし、それは最終的に世界に対して自身の危険さを露呈する事となった。

かつて共に轡を並べ戦った者たちが向ける刃の先に居るのは  
自分。

少年には彼らに刃を向けることは出来なかった。

居場所を失った少年は、故郷の泉の妖精の力を借り、その『世界』  
を離れた。

少年は当ても無く、ただ惰性のままに世界の狭間を流れる。

自分の生きる意味、生きる場所を探して……

## 00：プロローグ（前書き）

この小説は、作者がブログ、『日々遊々』に連載している、『ウィッチーズと独りきりのウィザード』（ストライクウィッチーズ オリ主来訪SS）の前日譚？に位置する作品です。

主人公が上記の作品の主人公と同一人物ですが、見ずとも問題ありません。

時間軸は上記の作品の約10年前です。

賛否両論ありますでしょうが、ご容赦ください。  
また、作者は遅筆です。その点ご了承ください。

## 00：プロローグ

### 00：プロローグ

暗い、闇の中を、僕は膝を抱え流されていた。  
故郷を追われ、異世界を転々と渡る日々。

滞在するのはごく短時間、それでいて最小限。  
生きていくうえで最低限の食料・飲料などを手に入れたら、『世界を渡る』魔法を使って時空の狭間に身を委ねた。

……流される間、やる事は無い、……だけど考える事はある。

『あのときの選択は、正しかったのか？』

僕は何度も、それこそ数え切れないくらい自問してきた。

故郷の街　都市国家……もっというなら貿易都市ってやつ　を襲  
った狂信者の集団。

目的は『世界の破壊と再生』……正直、僕には彼らのやりたい事の意味がわからなかったけど。  
その集団の名は『輪廻の終焉』、彼らは国境を跨いで、大陸中にはびこっていた。

故郷を襲われる以前から周辺国家は危機を予測、連合軍を結成し、彼らの撃滅のため戦っていた。

実際、その集団は壊滅寸前。  
全滅までもう一歩って所だった。

そんな時、故郷にそのメンバーが紛れ込んで起こした細菌テロ。

……時期が悪かった、そのときは年に一度の祭りの最中、警備も甘くなっていた。

ばら撒かれた細菌は、考えうる限り最悪の効果。

それは『人間を含む生物全ての凶悪モンスター化』。

街の騎士団　とつても強かった。だからこそ大国に周囲を囲まれていても、独立を保っていた。だからこそ大国に周囲を囲まれても防衛態勢をとったけど、手遅れだった。

……その事件が起こったとき、僕は街を囲む城壁の外にいた。

父上　同時に街の代表……つまりは王様ってこと。よって僕も『王子』ってことになる。『元』って付くけど　と喧嘩して、街を飛び出してたんだ。

父上は都市を結界で囲んで、被害が城壁の外に拡大しないように手を打った。

だけど、それはつまり『自分も逃げられない』っていうことに他ならない。

父上は僕に『結界内の消滅』を命じた。

反論したけれど、意見は覆らない。

……最終的に、僕は自分の意思で故郷を消した、王家に伝わる禁じられた魔法で。

そのあと、僕は連合軍に身を投じた。  
親から授かった…というよりはもはや血統である膨大な魔力。そして、亡き師匠達に教え込まれた剣術。  
生まれつき攻撃魔法が使えない身体だったけれど、敵を蹂躪するには充分すぎた。

返り血を浴びながら戦い続け、最後にはこの手で相手のリーダーの首を討ち取った。

『敵を倒す』、その目標を遂げてしまった僕にやる事など無かった。残滓すら残らずに世界から消滅した故郷。僕は故郷にほど近く、同時に故郷の聖地でもあった泉のほとりで空を眺めていた。

そんな僕に刺客が差し向けられた。

殺されかけた理由は、『一人で国一つ消せる危険因子の抹殺』。  
彼の話によると、自身は尖兵で、ここには連合軍が向かっていると  
の事だった。

…僕だって、次の王として教育を受けてきた。

だからこそ理解できる。危険分子は潰すに限るということ。  
だって、それが失敗したからこそ、街は攻撃されたんだから…。

…僕は泉に身を投げた。一度は一緒に戦った人たちに剣を向けたく  
はなかったし、…それ以前に生きる事に疲れちゃっていた。

………知らなかったことだけど、その泉には妖精がすんでいた。

『ご先祖様ー つまりは初代様 は泉の妖精と恋に落ち、結ばれた』そういう伝説は確かにあった。でもそれはおとぎ話にすぎないとされていた。

住んでいたのは初代 つまり、何代か前の人。他界してるから会ったことは無い と結ばれた妖精の末裔。

僕は彼女に助けられた。

同情してくれた彼女に、初代が後世に残さず、心の内に秘めた禁術『時空の転移』を教えられ、故郷のあった『世界』を離れた。

……彼女には感謝してもしきれない。

旅立つ僕に餞別として、妖精の製法で作った剣に盾、鎧までくれた。けど、旅立った僕は、目標も、生きる意味も見つけられず、ただ流れのままに生きるだけ。

闇の中、考える事は一つ。

『あの時、こうしていればよかつたんじゃないか？』

…不毛な事だとは思うけど、考えずにはいられない。

あの時もう少し考えていれば、父上や母上、剣の師匠や魔法の師匠、街の人々を救えていたんじゃないか…って。

その日もずっと考えていた。

突如発生した時空の乱れに飲まれ、寄る予定が無かった世界に叩き落されるまでは。



## 00：プロローグ（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

## 01：出会いは廢ビルで（前書き）

主人公の一人称のみで作品を書くのはこれが初めて…

慣れるまで時間がかかりそう…

## 01：出会いは廃ビルで

01：出会いは廃ビルで

「…痛い」

僕は頭をさすりながら立ち上がる。  
訳がわからないままに時空の狭間から叩き落されて、頭から地面に落下。

いきなりだったのと、地面までの距離が短すぎたせいで全然受身が  
できなかった

「火山の火口や、深海に出なかっただけマシ…かな？」

とりあえず、さっさと時空の狭間に戻ろう…。

そう思って、魔法を発動させる。

「……………？」

…時空の狭間へと繋がるトビラが開かない。

僕は、細心の注意を払って時空に対し探査の魔法を掛けた。

探査結果は、『時空の乱れ』。

…これに関してはどうしようもない。  
天気みたいなものだから、治まるのを待つしかない。  
……こつという何の予兆も無く乱れが起きるときは、何かしら原因があるはずなん  
だけど。

しょうがないので、僕は現状を確認する事にした。

ここは…おそらく廃棄された建築物、照明は無し。  
窓から見える景色から時間は夜、そして2階。  
半径100メートルに危険な野生生物の反応なし。

「……居候けつてい」

雨風が凌げるのは幸せな事だからね。

僕は魔法を使って毛布を取り出すと、部屋の片隅に行つて丸くなる。

「……………?」

…下の階から声が聞こえた気がした。

……女の子の声と、…下卑た数人の年若い男の声。

僕は耳を澄ませる。

「ちよつと！アンタ達、放しなさいよ！！」

「黙れ！このクソガキが！！」

「威勢のいいガキだぜ！騒がしい！！」

「……………」

……僕はゆっくり身体を起こし、足音を殺して階下へと降りる。

慎重に慎重に、気取られないように歩き、声の音源の部屋の入口にたどり着いた。

僕は、スツと僅かに顔を覗かせて室内の様子を窺う。

明かりがついていないから、窓の外から差す月明かりだけが頼りだ。

視界に入ってきたのは、こちらに背を向けて立つ3人の男。そして、男達の隙間から垣間見えた腰まで届くキレイな金髪の女の子。

男が邪魔でよく見えないけれど、女の子は後ろ手で縛られ、冷たい床に座らされているようだった。

「私を誘拐して、何のつもり！？」

「はア！？カネに決まってるだろう？知ってるぜ、お前のオヤジが実業家で金持ちだって事もなあ！！」

「カネってえのはあるところにはあるもんだからな！」

「……………」

……どうやら、あの女の子は誘拐されたらしかった。

とりあえず、さっきから馬鹿みたいに大声を上げてる2人はたいし

た事無い。

危険度的には、故郷にもいた酒癖の悪い人間程度だろう。

…でも、その2人が、女の子を威圧するよう目の前に立って恫喝してる中、壁に背を預けてずっと黙ってるヤツ。

あれは、…キケンだ。

傭兵崩れのような、かといって無能でもなさそうな。

…恐らくは、暴力が仕事。

そして

僕みたいに

人を幾人も手に掛けて、血に塗まみくれている。

………この一件、見なかったことにしよう。

僕は、この女の子を見捨てようと決めた。

不意を撃った攻撃を仕掛ければ、ほぼ確実に勝てる…とおもっ。

けど、わざわざリスクを冒す必要は無い。

「ねえアニキ。コイツ、カネを貰ったら殺しちまうんでしょっ？その前にやらせてもらってもいいですかね？」

「はあ？オマエこんなちんちくりんがいいのか？」

「いいじゃねえかよ。…で、どうです、アニキ？」

「勝手にしろ。…俺はカネさえ貰えればそれでいい」

「ちょ、ちょっと！何言ってるのよ！？やめなさいっいたら！！ねえ！！！」

「アア、黙れって言ってんだよ！？」

男が女の子の髪を掴んで持ち上げると、もう片方の手で彼女の頬を打った。

室内にその音がこだまする。

男が女の子を持ち上げたせいで、僕は女の子の顔を窺い見ることが出来た。

目の淵に涙を溜め、おびえる彼女を。そして

「さあて、どうしてやろうかなア！！！」

その口が、小さく『だれか、たすけて』と動くのを。

……僕は馬鹿なのかもしれない。

自分の安全ではなく、見ず知らずの他人の女の子を『助けよう』…  
そう思うなんて……。

でも、どうしてか、僕はそんな思いを抱いた自分が……不思議と、嫌いじゃなかった。



## 01: 出会いは廃ビルで (後書き)

とりあえず、文の量は少なめで、速度重視でいこうかと。

## 02：急襲、そして、出会い

02：急襲、そして、出会い

「…武器」

とりあえず、手ごろな武器を探す。

僕の命の恩人でもある彼女　本来、妖精に性別は存在しないらしいけど　のくれた剣は出せばある。

……けど、僕は故郷を後にして以来、剣を握っていない。

……剣を持つと思い出してしまふ。故郷をコワされた憎しみに身を委ね、敵を斬っていたあの時を、…あの肉を斬る感触を、……あの断末魔の声を。

いったんその場を離れ、周囲を物色する。

その後、すぐに手ごろな武器は見つかった。

よく判らない金属で出来たパイプ。部屋の片隅にほうられていたやつだ。

………それにしても、この建物は何で出来てるんだろう。灰色だからレンガじゃないし、土壁でもないし。

……まあ、そんなこと、どうでもいいか。

ちよつどいい長さ。ちよつと軽いけど、殴るには充分。

僕は軽く素振りをして感触を確かめた。

「…使い勝手を求めてもしょうがないよね」

このパイプは武器じゃないから、剣に比べて握りくいはあきらめるしかない。

僕は、心持ち早く先ほどの場所に舞い戻る。

さつきと同じ場所に身を潜めた瞬間、布地が破れ、ボタンが引きちぎられる音が響く。

「ねえ…、やめてよ…、やめてったら…」

「助けなんてこねえよ、大人しくしてな」

…覗き見るまでも無い、何が起こっているのかは簡単に想像が付く。

でも、同時に安心する。『間に合ったみたい』と。

…だけど、これ以上の余裕は無い。

僕は身体の隅々にまで魔力を行き渡らせ、膂力を強化する。

その強化の影響で、僕の髪が烏羽色から白銀に。

そして、自分の目で確認は出来ないけれど眼の色も茶色から碧色へと変わる。

……この変貌の原因はこの身体に流れている妖精の血脈。

僕の体に流れる妖精の血は、初代様の子供……つまりは妖精とのハーフである二代目に比肩するくらい非常に濃いものらしい。

魔力を行使する事で、体内の妖精の血が活性化するから……とか恩人の彼女が言ってたけど、細かい事は判らない。

重要なのは、その力をどう使うか。……ただ、それだけ。

僕は、入口の陰から飛び出した。

背を極力低くし、地面をスレスレを矢の様に駆ける。

最初に片付ける敵は、女の子を襲おうとしている男。

僕は、勢いをそのままパイプに乗せ、しゃがんで彼女の服に手を掛けていた男の首筋を叩き払う。

……『ぐしゃり』と手に残る嫌な感触。

死んではないだろうけど、脊椎に損傷はあると思う。

……まあ、取りあえず奇襲の第一段階は成功。

一撃を食らわせた男が昏倒し、ゆっくりと前のめりに倒れていく。

そのままでは、男が女の子のしかかる形になりそうなので、振り向きざまに上段蹴りで顎を蹴り上げた。

一瞬だが、少女と視線が重なる。

『…え?』という表情。

僕はそれを視界から外し、もう一人の弱そうな方へと駆ける。

こちらも、まだ状況が掴めていないらしい。

一瞬で距離を詰め、両足の向こう脛を強打。

立っていられず、しゃがみ込んだ所を最初の一人と同様に首筋に一撃を叩き込んで意識を刈り取る。

この間、僅かに3秒。

僕はすぐさま最後の1人に向き直る。

……僕の読みは合っていたらしい。

彼は、声一つあげずに服の内側からナイフを取り出し、僕に向かっ

て投擲していた。

牽制などではない、僕の眉間>みけんくを狙った死の一撃。

僕は眼前に迫っていたソレを顔を逸らすことで避ける。

わずかに間に合わず頬に一筋の赤い線が走るが、戦闘に支障は無い。

僕は彼の寸前で跳ね、全体重を乗せて上段から頭めがけてパイプを振り下ろす。

……いくら筋力を強化しようが、リーチは子供。

長期戦に持ち込まれたら、…殺される。

僕としてはこの一撃で決めるつもりだった。

………だけど、男は暗闇の中、明かりの差さない天井近くからの一撃に反応してみせた。

もう一方の手に握ったナイフでパイプの勢いを弱め、空中で一瞬動きが止まった僕の腹に蹴りを放つ。

「ッ………！」

僕はそのまま壁に叩きつけられた。

…先の戦い以来、鍛錬を避け、何もをやらなかったツケだ。

戦場で剣を振るっていた頃は、この蹴りにも反応できていただろうし、食らっていたとしても空中で態勢を立て直して壁に足をつき、そのまま反撃に移れていたはず。

男は流れるように次の行動に移っていた。

パイプを受けたナイフをそのまま投擲。僕は避けることが出来ず、腕を盾にする事で辛うじて顔面への一撃を防ぐ。

……もちろんその代償は大きかった。

盾にした左腕に深々と突き刺さった刃、焼けるような痛みと、その傷から血が抜け、体が冷えていく感覚。

……慣れたくは無い感覚だった

「…………ガキ、お前カタギの人間じゃねえな？」

暗くてよく分からないが、手に僕の見たことがない黒光りする武器をこちらに向け、油断無く構えた男が僕に声を掛ける。

…『カタギ』？ 何かの隠語だろうか？ あるいはこの世界の身分、あるいは職業なのか？

頭の片隅でそんな事を考えながら、僕は立ち上がる。

幸い、パイプは手に握られていたままだった。

僕は無言を貫き、パイプを右腕のみで構える。

「…だんまりか。…まあいい、おとなしく死

話の途中で、僕は床を蹴った。

相手の出鼻をくじき、この一撃で仕留める。

出せうる限り全力での速度の踏み込み。

この暗闇の中では瞬間的に移動したかのように見えているだろう。

僕は一瞬で彼の懐に入り込んだ。

…彼は、辛うじて僕の動きに反応してみせた。

半歩引き、手に持っていた金属を僕に向ける。

この距離まで近づくと、ソレの細部まで確認できた。

黒く光るソレは、引き金が付き、その形状は故郷にあった何処と無くボウガンを彷彿とさせて……

背筋に走る悪寒。

だが、ここまで来た身体をとめる事は出来なかった。

ほとんど同時に僕の持ったパイプが彼の鳩尾を突き、引き金に掛かった彼の指が引かれる。

鳴り響く轟音、放たれた不可視の何か。



それが僕の右胸を貫いた。

矢が深々と刺さったような…、いや、経験したことのない痛み。僕は、自分でも予想以上に冷静な頭で『左腕の出血の倍くらい』と目算する。

「…くそつたれ」

男がつぶやきながら力なく崩れ落ちた。

それを見届けた瞬間、足から力が抜け、床に膝を突く。

「……が…はっ」

僕はほぼ同時に吐血した。……おそらく肺がやられてる。

痛みはきちんと感じるけれど、僕は誰か他人の怪我を見ているような気分だった。

『…倒れこんだらもう起き上がれないな』そう思いながらパイプを杖代わりに使って、僕は女の子の元へ近づく。

「…ちよ、え？ あなた、血が、たくさん、え？ だいじょうぶなの？」

…？

……何でこの子は見ず知らずの僕を心配するんだろう？

僕は彼女の手を縛っていたロープを解こうとして、あきらめる。

…手が震えて結び目を解けそうに無い。

しょうがないから、腕に刺さっていたナイフを抜いて、それでロブを切った。

「……………」

…彼女の服は破られていて、ちょっと目のやりどころに困る格好だったから、僕は魔法で毛布を取り出すと、無言で肩に掛けてやる。  
……ちよつと血がついちゃってるのは許して欲しい。

「…あ、ありがとう」

「…ん」

……………どうしよう、ここしばらく人間と話してなかったから、どう話せばいいのかわからない。

「…ってそうじゃなくて、あなたは誰！？ その怪我は！？ 何でここにいるの！？」

…うん、彼女、パニックだね。

人間って、パニックになってる人を目にすると、逆に落ち着くんだよね。

とりあえず、血の流れすぎで手足の感覚が無いから早急に傷を塞ぐ。

「…『傷を、癒やせ。精霊サフィラスの名の下に』」

……うん、これで5分もしないうちに傷はふさがる。

ついでに、男に叩かれたせいで腫れていた彼女の頬をひと撫でして、治療する。

………あれ、何か驚いてる？

僕、なにかマズイ事した？

「…ああ、もう！とりあえずあなたの名前を教えなさい！ 私はアリサ、アリサ・バニングス！」

女の子が大声で怒鳴る。

怒鳴られながら自己紹介されたのは、初めての経験だよ…。

「…僕はジーク。ジーク・G・アントワーク」

これが僕とアリサの、初めての出会い。

そして、長い、長い付き合いの始まりだった。

## 02：急襲、そして、出会い（後書き）

ちよつと補足：主人公は『拳銃』という文化？が無い世界の人間なので銃火器の存在を知りません。

それにしても、やっと主人公の名前が出てきましたねww

誤字脱字などありましたらご一報ください。

では。

## オリキャラ紹介（前書き）

このキャラ紹介については、物語の進行に合わせて変化していきます。

まめに見ることを推奨します。

## オリキャラ紹介

主人公：ジーク・G・アントワーク  
ゴスペリオ

種族：半分くらい人間（もう半分は妖精）

職業：魔法剣士&騎士

性別：男

身長：… 同時期のクロノと同じか、もうちょっと低いくらい

年齢：9歳

### 容姿

髪の毛は烏羽色で伸ばしており、後ろでくくっている。  
戦闘時などそこそこ大きな魔法を使っているときには髪の色が白銀色に変わり、眼の色も茶色から碧色に変わる。

### 性格

子供らしくない。

人間不信。

悲観的。

この世を諦めきっている。

本来は明るく、優しい性格だったが、生まれた世界での出来事により上記の性格になってしまった。

好意を向けられる事に慣れていない&向けられている事に気づかない。

『僕を好きになる子なんて居るわけが無い』と思っている。

とある事情（精神的なもの）から、剣を握れない状態になっている。

能力

剣技・魔法ともに天性の才能を持っている。

8歳のときに実力で近衛騎士団魔法騎士に叙任された。

得意な魔法ジャンルは防御系・サポート（回復など）系・剣技系・

身体能力向上系

生まれつき攻撃魔法を使えないハンデがあるが、剣技と補助魔法の多様さで戦ってきた。

特殊能力：??????

補足：故郷を含め、これまで訪れてきた世界全てが中世ヨーロッパくらいの文明で、魔法が普通にある世界だったので、物語の舞台である海鳴市で見るもの全てが新しい。

所持武装

剣・鎧・盾。全て妖精の謹製

剣

銘は「ティターニア」

両刃の、片手でも両手でも扱えるように設計された剣。材料は、オリハルコン&ジーク自身の血液。

そのため、この剣は『魔法の杖』としての使用も可能。

## 鎧

分類としてはプレートメイル

胸部と腰部、腕部と肩部、そして手甲・ガントレットのみ装備。

特徴としては、これらの鎧（胸部・腰部・肩部）は身体の前面のみあるだけ。背後から攻撃される事は考慮していない。

防御力より、動きやすさを重視。

……わかりにくいようだったら、剣道の『胴』と『垂』（膝にかかるくらいの大きさ）、『籠手』

を想像して、それを全て金属に置き換えてもらえるといいかもしれません。

神代の金属の合金製。

羽のように軽く、生半可な魔法攻撃は無効化する。

物理防御力も相当なもの。

## 盾

楕円形の、左腕の肘から先30センチくらいまでを覆うもの。

防御だけでなく、近接戦での殴打用にも使用される。

盾の内側には、短剣が一振り収められている。

素材は鎧と同じもの。

なのはの「ディバイン・バスター」くらいはこの盾単体で受けきる事が出来る。

## 銃



ベレッタM92F えむきゅーじゅーにえい

ジークがアメリカで買って、無許可で国内に持ち帰ってきた拳銃。アリサを守るために、剣の代用品として手に入れた。

弾丸は通常の9ミリパラベラムではなく、SRゴム弾という非殺傷弾。

あくまで人間用の兵器なので、魔法生物には十分な火力を持たない。

??? (所持しているが未出)

ジークが対魔法現象のため、デビッドの許可を得たうえで購入してきた新装備。

弾丸は通常弾で、対魔法障壁・対魔法・威力向上の魔法文字が刻まれている。

対魔導師戦闘も考慮に入れ、同じ細工を施したSRゴム弾Verも存在する。

## オリキャラ紹介（後書き）

…あ、ちなみに、俺は厨二というのはほめ言葉と思ってるんですけど、  
る人間です。

**03：予想外な状況（前書き）**

1日、間が空きました。

申し訳ない

3/24 改行がおかしいので修正しました。

### 03：予想外な状況

03：予想外な状況

「……………あれ？」「……………」

目の先には天井が見える。

……………というか、僕は何でベッドにいるの？

寝た覚えはないよ？

「っ……………よししょっと」

僕は反動をつけて身体を起こす。

部屋の調度品は……………うん、かなりいいやつだ。見た目は普通だけど、細かい所まで綺麗に作り込まれてる品々。

……………って、いつの間にか服も変わってるし。

……………何があったか思いだそう。

……………確か、いきなり時空の狭間から叩き出されて

ガチャリ

この部屋の扉が開く。

「…ん？」

僕はそちらに目をやる。

扉の向こうから金髪の女の子が顔を出し、僕と目が合うと石になったかのように動きを止めた。

「ジ、ジ、ジ、ジーク！？目が覚めたのね！？パパ呼んで来るからおとなしくしてなさいよー！！」

勢いよく扉が閉められ、ダダダ………と足音が遠ざかっていく。

……ああ、思い出した。

アリサ、アリサ・バニングス。僕は彼女を助けたんだっ

……。

「まずは娘を助けてくれた事、礼を言う。…ありがとう」

アリサの父親：らしき人が僕に向けて頭を下げる。

「……えっと、どう、いたしまして……」

「……人にこんなふうに『ありがとう』って言われるの……いつぶりだろう。」

この人がアリサのお父さん……。

この部屋まで走ってきたみたいだ。息がかなり荒い。

「……パパ、名前、名前」

「む、そうだなアリサ。私の名はデビッドだ」

デビッドさん？が、アリサに小突かれて自己紹介をした。

「……僕は、ジーク・G・アントワーク、です」

「ああ、知っているよ」

「……何だろう、この徒労感は……！」

「あんだ、2日も寝っぱなしだったのよ？」

「……え？」

「……2日？」

僕は首を傾げた。

「……………覚えてないの？」

僕は素直に、こくこくと頷く。

「アンタ、2日前、自己紹介したあとすぐに倒れたのよ……………」

……………ああ、それ、たぶん、貧血。

血、流し過ぎてたか……………。

それよりも

「……………アリサ、ケガ無い？」

僕はデビッドさんと並んで座っていたアリサに手を伸ばし頬をつついてみた。

……………うん、ふにふにしてる。腫れてはない。ちゃんと治ってた。

……………あれ？

アリサの顔が赤い……………

「アリサ、熱あるの？」

僕は手を上にスライドさせて、おでこに当てた。

……………うあ。どんどん真っ赤になってく。こんな症状見た事ないよ？

うん、『治療してあげた子の健康状態を気にかける』。僕のこの対応は間違っていないはず。

アフターケアは重要だからね。

「……………あ、」

アリスがぶるぶる震えながらうつむいちゃった。

「……………?」

「あんたのせいでしょうが!」

……………まさか!?

異世界から来た僕自体が病気の原因……!?  
しまった……!その可能性は考えてなかった!!

……………早くこの場を離れなくちゃ……。

「……………お世話になりました。すぐに出て行きます」

僕は小さく頭を下げてベッドの上でぐるりと回り、床に足をつける。

「は!?!なんでそうなるのよ!?!?」

……………それ以外にどう解釈すればいいの?

「ふむ、私としてもそれは困る。……………あの場に何故君がいて、何が起こったのか。私は君に聞かなければならない」



デビッドさんの鋭い眼光が僕を貫いた。

「…実際に目にしてもいまだに信じられん」

「本当に魔法なのね…」

…僕としては2人のその反応にビックリです。

説明を始めてすぐにわかったこと。

それは、この世界には『魔法』という文化、そして技術が無いって  
事実。

…僕としてはそれが信じられないんだけどね。

天井の明かりは『電灯』っていうものらしいけど、僕はガラスの球  
体の中に光を閉じ込める魔法だなあ。って解釈だったのに…。

話が進まなかったので、簡単な魔法をいくつか披露して『魔法』つ  
て存在の証明。

それから時空の狭間から叩きだされた時からアリサ救出戦の説明ま

で行って

「…納得してもらえました…よね？」

今は、2人が現実を直視するのを待っているところ。

……2人には、故郷の事は喋っていない。

……まだ僕の中でも整理がついてないし、ちゃんと話せるかもわからない。

………それに

「…OK。理解したわ。つまりアンタはこの世界の住人じゃなく、異世界の人間。世界の間を移動してる最中にいきなり…地震みたいなものに出くわした。結果としてこの世界に落ちてきて、誘拐されていた私を助けた。……あと、その地震の影響でこの世界から出られない。……これでいい？」

話したとき、拒絶されるのが………怖い。

僕は内心の想いを表に出さず、アリサの言葉にうなずいた。

「…うん、概>おおむ<ねは」

「わかったわ！じゃあアンタ、ウチに住みなさい！！いいでしょ、パパ？」

……え？

……なんでそうなるの？

「ああ、娘の命の恩人だ。構わない」

……デビットさんまで……!?

「……え、いや、でも」

「いいからおとなしくお世話になってなさい！いいわね！

」！

……よくない。

僕のそんな内心のつぶやきを無視して、アリサは一方的に話を終わらせる。と部屋から去っていった。

明日は、『学校』というものがあるからもう寝るらしい。

……『学校』っていうのは、よく分からないけど。

今の時間は……夜の11時。

きつと、学校っていうのは朝早いんだろう。

「……まあ、娘は言い出したら聞かないから……。我が家だと思っ  
て滞在してくれ。……何なら永住してもいいぞ？」

「……前向きに検討しておきます」

こういっておけば何事も穏便に納まる。昔、師匠がそう教えてくれ

た。

「…さて、私には聞きたい事がもうひとつある」

「…?」

…まだあるの？

「君は、これまで、いったいどんな人生を送ってきた？」

……ッ!?

「…どういう、意味ですか？」

僕は動揺を押し隠し、聞き返した。

「君が倒した男達…、ああ、彼らについては安心してくれ。警察…  
つまりはこの国の治安を守る組織に引き渡した」

「…それは、よかったですね」

「…この話には続きがあつてね、その関係者に話を聞く機会があったんだが、…興味深い事を教えてもらったよ」

…僕は、沈黙を貫く。

「彼らは、人間の急所的に攻撃されていたらしい。一歩間違えば命すら奪える箇所をね」

…当然だ、敢えてそういった箇所を狙ったんだから。

「…その人はこうも言っていたよ『普通、人間というのは急所を攻撃するときにはどうしても躊躇>ためらくいが生じる。当然だよな、命を奪うかもしれないんだ。でもこの犯人達につけられたキズはためらわれた痕跡が無い。…こいつらを倒したのは人を殺す事を辞さない人間だ』…とね」

「…じゃああなたは、…あなたはどうしてもそんなキケンな人間を家に居させるような真似を？」

…僕はデビッドさんの言葉を否定しない。

…否定など、出来るはずがない。

想いに反して、結果的に僕が手を掛けた街の人。

憎しみ、怒りを抱いて明確に『殺す』意志を持って斬った故郷の仇かたき 達。

万を軽く凌駕するヒトの血で、僕の手は染まってる。

見知った人を斬るのはためられる。だけど、僕は僕に仇なす者、身内 もう、居ないけど…ね に害なす者は慈悲なく斬り伏せる。

『生命 いのち というモノは平等だ』 そんな事を言う奴が居るかもしれない。

…でもそれはウソ。

そう言ってる人だって、『身内』と『見ず知らずの他人』、命の天秤にかけられたら『身内』をとる。

ニンゲンなんて、そんなものだから……。

「君を家に置いた理由かい？」

僕は黙ってデビッドさんの瞳の内を覗く。

…真意を、知りたかった。

「私の私見だが、君は本来…とても優しい子なんじゃないかと思っ  
てね」

「…何を、根拠に？」

そんな風に思える理由が、…わからない。

「…ふむ、勘だよ、勘。…そう睨まないでくれ、冗談だよ。……  
…私は仕事上多くの人に会う。…人を見る目はあるつもりだよ」

デビッドさんの目は、妙に確信を持っているようだった。

「…とりあえず、しばらく……お世話になります」

「ああ、狭い屋敷だが寛いでくれ」

デビッドさんが部屋を出て行く。

…確かに僕の住んでいた城よりは狭いと思うけど、……世間一般ではかなり広い部類なんじゃない？

僕はそう思いながら再びベッドに身を委ねる。  
傷はふさがってるけど、血が足りない。

……休息が、必要だった。

この時は全然思いもしなかったけど、これが僕の人生の3番目  
1番目は故郷のテロ、2番目はアリサとの出会い、……だ　　の転機。

心の闇から、僕が引き上げられる、その、……第一歩だった事に、  
……間違いは無い。

### 03：予想外な状況（後書き）

…色気が、足りないなあ。

今回は、ジークがちょっと子供っぽくなります……たぶん。

アニメ展開に入るのは、数話先の予定です。

では。



04: やつく・でかるちゃー! (前書き)

速度重視で書いたので、誤字脱字があるかも…ご了承ください

早くアニメ編に入れるよう駆け足で進めていますから、内容としては薄めになってしまいました…反省。

感想を、お待ちしております。

2011・03・16 一部表現を訂正

04: やつく・でかるちゃー！

04: やつく・でかるちゃー！

「アリサ！アリサ！！ アレは何だ！？」

「アレ？ …ああ、アレは信号機よ」

すごい！この世界すごいよ！？

僕は、いまとっても感動しているよ！！

僕がいま乗ってるヤツは『車』って言うらしいけど、金属の塊が動くなんて信じられないよ！！

わーい！！

……ごめんなさい、ちょっと取り乱しました。

僕は目が覚めた次の日、デビッドさんと交渉し、アリサの護衛として雇ってもらうことにした。

…何もせずに、衣食住だけを貰うのは情けないからね、……半ば強引にだけ仕事を貰った。

今は学校から帰る途中のアリサに説明をして貰いながら帰っているところ。

アリサの家の使用人、鮫島 「さん」はつけなくていいって言っていたがアリサの迎えに行くって言ってたから、便乗させてもらったけど……ホントにすごい……!

「まったく……、アンタの居た世界ってどんだけ遅れてるのよ？ 移動手段ってなんだったの？」

「ん、……遅い順に、徒歩、馬、」

「……意外と普通ね」

……アリサが考える普通じゃない移動手段ってなんなの？

「 飛行魔法、飛竜、……で、一番速いのが転移魔法」

「 待てい！？ちよっと待てい……!」

……アリサ、顔が怖い、あと近い。

「 ……なにか変？」

……ごくごく一般的な移動方法だよね……? ?

「 なに？飛べるの？それ以前に飛竜って!？それに転移魔法!？ワープなの？ワープなのね!？」

……重い。 ……身を乗り出すな、押し倒すな。

「 ……説明、する。鮫島、この『車』は、どのくらいの速さ？」

僕はこの世界のスピードの基準がわからないから聞いてみる。  
あ、ついでに言うと、鮫島にも『魔法』の存在は教えた。…同じ敷  
地でお世話になるから、教えといった方が楽だ。

「速度ですか？時速60kmほどですな」

……速度の単位がわからない。

「…普通の飛行魔法がこれくらいの速さ。飛竜は、この倍か、もっ  
と速いくらい。……転移魔法は、発動条件があるけど、ほとんど一  
瞬」

「…魔法って…魔法って……」

……アリサが頭を抱えて呻いてる。

…僕、何かへんなこと言った？

「…頭痛？」

「違うわよ！…はあ、アンタの世界ってやっぱり『魔法』の世界な  
のね…ちよっと楽しそう」

……そう思える理由がわからない。

「僕は、こっちの世界の方が、……羨ましい」

「え、なんで？」

不思議そうなおその顔に、僕は、ちよっと寂しくなる。

……アリサと僕は、科学とか魔法とか抜きにして、住んでいた『セ

カイ』が違つ。

ほんの短い時間だけど、こうやって街の中を周って、気がついた。この街には『死の臭い』がしない、皆が…笑っている。

…たぶん、戦争とかも、無いんだろう。

「…ジーク？」

「…なんでもない」

アリスの問いかけに、僕は首を振って、窓の外を見つめるのだった。

…今は亡き、故郷の街並みを、胸に、…抱きながら

結局、アリスは僕に無理にその理由を聞き出そうとはしなかった。心の内を悟られたつもりは無いけれど、態度に…現れたのかもしれない。

…僕は、…未熟だ。

「ねえジーク、そういえば、今は『時空の乱れ』ってどうなってるの？」

「…僕、居たら邪魔？」

「…現状のところ、時空の乱れは治まる兆候すら見えない。こんな事、これまでに無かった。

明けない夜、止まない雨、死なない人間。

「…つまりは『ありえない事』、だ。

「そういう意味じゃなくてっ！あの、その、ね？」

「…今のアリサは『あわあわっ』て感じで、顔も真っ赤だ。

「…新種の病気？」

「と、特にアテも無く旅をしてるなら、…ずっとうちに居てもいいわよ…って」

「…迷惑掛けるから、いい」

「（…迷惑なんかじゃないのに）」

「？何か、言った？」

何か言っただけだけど、声が小さすぎて聞こえなかった。

「…バカ！」

「……………」

……いきなり罵倒される理由がわからない。

「そういえば、あのアリサを助けた時、男が使ってたのは…なんて武器？」

「は？ そんなのも……知るはず、無いわよね」

理解が早くて、結構。

「あー、『大砲』ってわかる？」

「うん。火薬で鉄の玉を飛ばす兵器。…故郷に在った」

「それを個人が携行できるようにしたモノ、って言えばわかる？」  
『ケンジユウ』ってものの」

…この世界の科学力、恐るべし。

「…欲しい」

「………は？」

アリサが硬直した。

「……………高価？」

「いえ、高価とかそういう問題じゃなく……」

ああ！？護衛対象　アリサ　が頭を抱えだした！

「ふむ、ジーク坊っちゃん、非合法なのを除けば、この国では一部の公的な人間を除いて拳銃は持てないのですよ」

……………なんですと！？

……………あの時奪つとけばよかった。

……………欲しかったなあ。

「じ、ジーク？そんなに落ち込まなくても……」

……………落ち込んでなんか、ないから。

……………ああ、欲しかったなあ。

「……………ああ、もう！！鮫島！なんかいい方法ない！？」

「ふむ……ご主人様が明日からアメリカに出張ですので、それを利用するというのは？」

「その手があったわね！！　鮫島、ナイスよ！！」



「お褒めに預かり、光栄です」

『ケンジユウ』かあ…

「私からパパに言ってあげるから、そうやって暗い雰囲気を纏わな  
い！」

「…！！ 手に入る！？」

僕はアリサの手を取って、アリサを見つめる！

「ほ、保障は出来ないんだからね？」

「いい、それでもいい！」

「は、恥ずかしいからやめなさいよ！」

アリサが慌てた声を上げてたみたい 正直、聞こえてなかった  
だけど、僕の耳には入らなかった。

……こんなに気持ちが悪ったのは、故郷で皆と一緒に過ごしていた  
とき以来かもしれない。

それに…再び、剣を握る勇氣は、……今の僕にはないから…ちよ  
どいい機会なんだと思う。

護衛するからには、武器が欲しいから 筋力強化した状態で殴つ  
たら…相手が死ぬかもしれないし…(デビッドさんに、殺害は厳禁

されたからね…  
ね。

04:やつく・でかるちゃー！（後書き）

連日の更新は、今日でいったん終了。

これからは4〜5日に一度くらいの更新速度になると思います。  
では。

オマケ

「アリサ、アリサ！」

「ん？ なに？」

「『ホテル』って…『宿>やど<』と一緒に？」

「まあ、おなじようなもんね。…で、それがどうしたの？」

「うん、あのホテルの看板に書いてある『宿泊』はわかるけど、『ご休憩』ってどういう意味だ？」

「…『ご休憩』？…私も意味がわかんない。…何で『休憩』なのか、  
鮫島わかる？」

「……………お二人には、まだ早>はよくうごさいますよ」

「「ふん」「

数年後、その意味を知り、ちょっとギクシヤクしてしまうことになるとは思いもしなかった2人であった。

終わり

05:オルタナティブ &lt;t>代替品</t>; (前書き)

3/19 改行が変だったので修正。あと、表現も。

05：オルタナティブ & It：代替品&gt;

05：オルタナティブ >代替品<

「La~ Lu~」

てっぼう、てっぼう、け・ん・じゅう!!

「……随分と嬉しそうだね」

デビッドさんが僕を困った目で見ている。

「…気のせい」

……武器を買って貰って喜ぶなんて、子供じゃないんだから。

…僕は未知の科学で出来た『工業製品』に胸を躍らせてるだけなのに。

僕は今、デビッドさんの仕事にお供して『日本 アリサが居る国

』ではなく『アメリカ 海の方この大きな国だ 』に来  
ていた。

目的はただ一つ『拳銃』の入手。

アリサの護衛を請合う以上、手は抜かない。

けど、前回の男みたいのを相手に剣を使わないで戦うと、僕は……  
アリサを守れないかもしれない。

だからこそ、剣の代替品が欲しかった。

日本では銃を手に入れるのは難しいらしいので、僕はその規則がゆるい『アメリカ』に連れてきてもらったのだ。

で、現状としては、無事に拳銃を2丁入手。

車　　リムジンという名前らしい　　の後ろの席で、僕はデビッドさんと2人で会話の真っ最中なのだ。

「き、気のせいか……」

「うん」

この武器の危険さは、僕が身を持って知ってるのに……

「……まあいい。だが君に渡す弾丸は『SRゴム弾』……つまり是非殺傷の弾丸だ。これだけは私も譲れない」

「……それで充分」

『日本』って国……だけではなくほとんどの国では『人を殺す事』は犯罪らしい。

正当防衛でも殺しはダメなんて……理解できない。

でも、デビッドさんやアリサに迷惑を掛けるわけにはいかないから、僕はそれに従う。

「だが、どうやってそれを日本国内に持ち帰るんだ？」

…この人は何で気づかないんだろう？

「…転移魔法で、この国からアリサの家まで一瞬で着くから、問題ない」

……というか、ここまで来るほうが大変だった。

転移魔法は発動条件として、『一度訪れた事がある』、『転移先の目印となる魔方陣』…

この二つがある。

つまり、僕は地図を見せてもらってもアメリカまでこれない。もっと言うと戸籍も無いから出国できない(らしい)。

仕方ないから、タイヘイヨウ？を飛行魔法で横断するはめに…。

……二度とやりたくない。

「……魔法とは…便利なものだな」

……ため息を吐かれた。

「ん、…便利」

とりあえず、僕はうなずき返しておくのだった。



「ジーク君そういえば気になっていた事が一つあるんだが…質問して良いかね？」

「？ ……内容による」

故郷の事なら……話せない。

「そう構えないでくれ。……君がこの銃を選んだ理由だ。強化プラスチックで出来た軽いものもあつたのに、なぜこの銃を？」

僕が買ってもらつた銃は、『ベレッタM92F』。1丁が1キログラムくらいの鉄砲だ。

「……剣は、もつと重いよ？」

剣に比べたらこんな軽い。

それに、筋力強化の魔法も使うから重さはあんまり気にならない。

「む、……質問が悪かった。『なぜ性能が似た、軽い銃があるのにそちらを選ばない？』」

という意味だ。軽い方が取り回しが良いだろう？。」

……デビッドさんは、わかってない。

「…デビッドさんは、戦争に出征して、イノチの奪い合いしたこと  
…ある?」

「……いや、ない」

「…じゃあ、わからないかもしれない。……デビッドさんは、戦場で一番怖い事って、何だと思う?」

「それは…殺される事じゃないのか?」

…違う。

「そうじゃない。それは、…お互い。そんな事考えたヤツは死ぬ」

…デビッドさんは、その後いくつか答えただけども、正解には近づかない。

「…さっぱりわからん。降参だ。」

「これは、僕個人の見解」

僕はそう前置きして口を開く。

「僕が戦場で一番怖い事は、武器が壊れる事。素手でも戦えない事は無いけど、

その場しのぎが精一杯。…たぶん、遠からず殺される。……戦場で

命を預けるのは仲間じゃなくて、結局のところ自分の腕と武器。…  
…命を預けるものだから、重くてズッシリしたほうが存在感があっ  
て安心できる。…違う?」

…細い剣は取り回しやすいけど、どこか頼りない。

それが良いっていうヤツも居るけど、僕はその意見に賛成できない。

…というか、重ければいざというときに鈍器として使えるしね。

「…そうなのかも、しれないな」

「ん、そう。…僕はここで降りる。…じゃ、日本で」

「む? ああ、ではアリサを頼む」

僕はデビッドさんと別れ、車から降りしてもらい人気の無い建物の影に行くと、チヨークで足元に魔方陣を描くと、アリサの家に飛んだのだった。

「…ただいま」

「あ、ジークお帰りなさい。パパは?」

家に着いた僕は、まず最初にアリサの部屋に向かった。

アリサはテレビ　薄い5センチくらいのヤツだ。僕が驚く事を予測していたアリサに注意されていたおかげで、テレビに殴りかからずに済んだ…　から目を離さない。

「まだ、アメリカ。…先に魔法で帰ってきた」

「ふ〜ん。魔法って便利ね〜」

…目を離さない。

「…何、見てるの?」

「ん〜? 昨日の夜、近所で原因不明の事件があったのよ。…ほら、見て」

僕はテレビに目を向ける。

「…動物病院?」

…こちらに来てから1週間くらい。

勉強の結果、ひらがな、カタカナ、漢字は読めるようになった。

…魔法使いに語学は必須だったからね、覚え方のコツがわかるから楽だった。

…数学　統治者の嗜みとして、経済・経営学は修めてるけどは全然出来ないけどね。

「そ。怪我人は居なかったらしいけど、建物が壊れたんだって」

映し出された事故現場。

…僕の動きが止まった。

…この慣れ親しんだ感覚、間違いない。

「……………アリサ、僕以外の魔法使って、いないよね？」

「……………ちよっと、それって!？」

…アリサは察しがいい、余計な手間が省けて助かる。

「…これ、魔法での戦闘の跡。魔力の残滓が感じられる」

この事件が、これからこの街 海鳴市 でおこる騒ぎの最初の  
一件であったとは、今の僕達には気づかなかつた。

05：オルタナティブ & It：代替品 & gt；（後書き）

補足：SRゴム弾 > ショックラウンス・ラバーブリット <  
弾頭がゴム。

着弾時に高圧電流が流れ、意識が飛ぶ。

スタンガンが弾丸になったものだと考えればOKです。

## 06・捜査、そして気づいてしまった現状（前書き）

アニメ換算で2話前編のお話です。

リアルが忙しくて執筆が進まないです…

## 06：捜査、そして気づいてしまった現状

06：捜査、そして気づいてしまった現状

テレビを見ていたアリサが『学校』に向かった後、言い忘れてたけど今は朝だ。アメリカと日本は離れてるから時差が存在する。……僕の些細なプライドのために言わせて貰えば、僕の故郷とこの世界の科学技術の差は歴然だけれど、『時差』の概念くらいあったからね？　僕は鮫島に頼んでテレビの『ニュース』に出ていた病院のところにも車で案内してもらっていた。

「ジーク坊っちゃん、申し訳ありませんがこの車ではこの先の道が狭くて入れませんので……ここからは歩いて頂けますか？この通りをまっすぐ行くとその病院が右手に見えますので」

申し訳なさそうな鮫島の言葉。僕は鮫島の指す通りを見やる。……確かにこの車じゃこの道を通るのは難しそうな道幅だった。

「ん、わかった。…鮫島、ありがと。歩いて帰るから、先に帰って大丈夫」

「はい。では、お気をつけて」

僕は手を振って鮫島を見送ると、踵を返して病院のほうへと歩いていく。

僕はここの地理に自信が無かったけど、……どうやらそれは杞憂だったみたいだ。



「……うわあ」

通りに群がる野次馬たち…いい目印だった。

テレビ越しで全体を把握できてなかったから被害の度合いがわからなかったけど、こつやつて直接見ると被害は意外と広範囲に及んでいた。

酷く陥没した道路、倒れた壁、傾いた石の柱 『でんしんばしら』  
と言って、それらを結ぶ『でんせん?』に雷くいかずちを通過して  
各家々に電気を届けるためのものらしい、………戦場になった  
村や町に比べればほんの些細な破壊なんだけど、この平和な国では  
大きな事件なんだろう。

道路は黄色のテープでふさがれ、紺色?の同じ服を着た大人たちが  
野次馬が入らないように視線を巡らせている。

……腰に堂々と『拳銃』を下けているから、アレがアリサの言っ  
ていた『お巡りさん』という存在なんだろう。

詳しく調べるにはもう少し近づきたいんだけど、人ごみを掻き分けるのは難しいし、何よりお巡りさん>見張り<がいるから諦めた。  
大まかに調べるだけなら、この距離でも充分だしね。

「…『残留魔力探査術式 弐型 術式名「ミネルヴァの眼」まなこ  
< 『』」

小声でそう囁いた僕を中心に展開される魔方陣。

周りの人の目には見える事は無いけども、ソレは一瞬でこの辺り一

帯をその内に収めた。

僕の脳内に周囲の魔力情報が、滝から流れ落ちる水のような奔流となつて入り込んでくる。

体感的には…20秒くらいかな？

…結果はアリサに伝えていた確信どおり。

新たにわかった事は次の3つ。

まず1つ、感じ取れた魔力は3つぶん。

中くらいのモノ 仮称は だ と、大きなモノ 仮称は  
、そしてソレより更に大きなモノ 仮称は ……念のため言っ  
ておくけど、『…』って名称は

手抜きじゃないからね？ただ名付けるのがめんどくさかつただけで  
…。

2つ、感じ取った魔法の残滓から考えるに、僕の知っている『魔法』  
とは全く違う系統に属している事。

3つ、辺り一帯を破壊したのは対象。と…たぶん が をど  
うにかしたっぽい事。

簡単な調査だから、今はこれくらいが精一杯。

僕は術式を破棄すると、その現場に背を向けた。  
長居をする必要はない。

僕はアリサの家に向かって歩き出した。

…ん？

……とりあえず歩く。

………？

………あれ！？

「……これは……迷子って状況？」

…おーけーおーけー。落ち着こう、僕。  
こんなときこそ冷静に。

僕は目に付いた公園に入って現状の把握を図った。

僕はぐるりとあたりを見回す。

似たような建物、似たような風景。画一化された構造物 『でん  
しんばしら』や『でんせん』、あと『ゆうびんぼすと』？とか言う  
奴の群れ。

……………ここは、どこなんだろう？

「… 鮫島の車に頼りすぎてたのが仇になるとは……………」

自分の足で歩かなくちゃ、地理はつかめないうってわかってた筈なの  
に…。

……………認めよう、僕は『迷子』だ。

「…うわぁ……………情けない」

ソレを認めた瞬間、情けなさが僕を押しつぶす。  
知らない土地で、見知らぬ科学技術にガラにも無く浮かれちゃって、  
拳句の果てに迷子とは……………。

「あ”くー!!」

僕は頭を抱えて呻く。

……………そんな風に呻き続けて数分後。

僕は街を当ても無く散歩する事にした。

…え？そうゆう結論に至った理由？

…ただ単に、暗くなつてから飛行魔法を使つて高いところに行けば、アリサの家を見つけられる　大きなお屋敷だったからね  
なあ…って事に気づいた。ただそれだけ。

…お恥ずかしいところをお見せしました。

僕はそんなお詫び文句を頭の片隅に流しながら街を歩く。

二度と道に迷う事が無いよう、この機会に街の地理を把握しておきたい。

…まあ、道に迷った状態で地理の把握ができるのか？と言われたら身も蓋も無いんだけどね……。

そんな事を考えながらも、僕は見知らぬ街を歩き続けるのだった。

## 06・捜査、そして気づいてしまった現状（後書き）

居候している家に帰れなくなる主人公…。

読者の方々はさまざまにSSを見てきたはずだが、こんな主人公は見たことがないはずだww

感想をお待ちしています。

## 07・尽きせぬ想い　そして　出会い

07:

僕は特に当ても無く、見知らぬ街を歩いていく。

今歩いているのは、おそらくこの街の大通り。

高い建物、不思議な店　『コンビニ』というらしい。アリサと前に街を回ったときに教えてもらった。1日中休まず1年間営業するということ…それは継続的な労働力の確保や商品の入荷、店内の環境維持、他にもたくさんの事が必要だ。……アリサに『コンビニ』の『ぽす<POS>しすてむ』と言うのを聞いたときには衝撃を受けた…。この世界の『あいていー技術』を生かした商業方法……学ぶところが多い　、街を行き交う車。

……ちゃんとした意思を持って異世界の街　魔法が存在しないのは始めての事だけど　を歩いたのはこれが初めてだ。

これまでは必要最低限の物資を手に入れたら、再び時空の狭間を流れ行くままにたゆたう暮らした。だった。

必然的にそのセカイにいる時間はほんの少し。

こうやって長い間、留まるのは、……初めてだった。

僕はアリサに聞いたこの国の話を、頭の中で反芻する。

飢えを知らない人々、あふれる物資、戦争を放棄した憲法 ……  
逆を返せば、周囲の国に攻め込まれないだけの力を持っているとい  
うことの証左なんだろうけど。

……僕には全て考えられない事だった。

亡くした故郷で、これらのことが実現できれば…。

「……馬鹿らしい」

…僕はその考えを即座に頭から打ち消した。

…失ったモノをとり戻すのは不可能。

決して小さくはなかった故郷を一瞬で、尚且つ余裕を持って消滅さ  
せられる、僕の膨大な魔力。

全てを使って、さらにこの命を代償にしても、亡くしたモノは帰っ  
てこない。

「……はあ」



僕は、重い、重い溜息を吐くと、いつの間にか止まっていた足を、再度動かしたすのだった。

繁華街を離れ、僕はまたさっきとは別の住宅の立ち並ぶ辺りに歩を進めていた。

街の中心部から離れたこの辺りは、住宅街と個人商店　この世界には『ちえーん店』という営業形式があつて、国の違いによって多少の特色は有るけども、飲食店の場合その店ではどこでも同じ味のもの食べられるとか…。…恐るべし　が主として構成されている。

…くー

「…おなか空いた」

体感時計での現在時刻は13時38分46秒

魔法使いにとって、

時間というのはとても重要な要素。大規模儀式魔法なんかは特にそう。時計を見ながら儀式を行うなんていうのは論外だからね　　だ。

…話を戻そう。

朝、アリサと一緒にご飯を食べてから何も食べずに散策してたせいで、おなかが空いた。

どの世界でも常識だけど、食事するにはお金がかかる。

そして僕の財布の中には

「な〜つ〜め〜」

デビッドさんから『お小遣い』として貰ったお金　紙で作られたお金を見るのも初めてだ　　が一枚入っている。

この国では、一番偉い人…ではなく、文化的な貢献？をした人がお金の肖像画として使われるらしい。  
僕が持っているお札に描かれている人物は、『我輩は猫である』とかいう本を書いた人だ。

…この本を読んだ後、アリサに『この世界の猫もしゃべるのか！？』と聞いたたら、『猫が喋るわけじゃない！』大笑いされた。  
……………大真面目だったのに。

というわけで、僕は昼食を摂るためにお店を探す。

『 お店がおいしい!』 っていう情報がないから、自分の嗅覚だけが頼りだ。

歩き回ること10分弱、僕の足が一軒の店の前で止まる。

僕の嗅覚と勘が正常なら、この店は当たりのはず。

問題はお値段なんだけど

『 本日のランチセット 750円 (+100円で食後の飲み物とデザートを付けられます)      ランチタイムは11:00~14:00まで』

僕は手に持つお札と、店の前におかれた黒板に書かれた値段を見比べる。

…大丈夫、お札のほつが桁が多い。

僕は意を決して店の扉を押す。

カランカラン

扉についでいた鐘が音を立てる。店内から溢れたコーヒーの香り  
名前は違ったけど同じ飲み物が僕の世界にもあった　　が僕を包  
み込んだ。

そして、出会うのだった

「「いらっしやいませ。喫茶『翠屋』みどりや」にようこそ」「

僕と同じ“におい”がする人物に。

07: 尽きせぬ想い そして 出会い (後書き)

短い文で失礼します。

次の話につなげる都合上、ここで切らないと次の話のテンポが悪く  
なってしまうそうなので…。

いまだに本編の主人公のはずなのはが出てこない(笑)

感想をお待ちしています。

08：なつかしい気配　そして　疑問（前書き）

もう5月。

大学生活が始まったのに、いまだに授業が始まっていないという  
の状況…。

それなのに忙しいとはこれ如何に？

08：なつかしい気配 そして 疑問

08：なつかしい気配 そして 疑問

……最初は、気づかなかった。

テーブル席に座って、頼んだランチセット 『かるぼなーら』つていう麺とサラダ、+100円したから飲み物とデザートが付くが運ばれて来るまでの間、僕は店内を観察していてソレに気が付いた。

「……………」

調理場を横切った男性。

一瞬見えただけのその姿に、僕は違和感を感じて注意を向けた。

料理が運ばれてからも、意識をそちらに向けながら 念のため言わせてもらつと、料理はきちんと味わって頂かせてもらった 観察を続ける。

作業の合間にだけ垣間見る事ができるわずかな機会から情報を集め、精査、推測を交えて結論を導き出す。

……男性を見て、僕の出した一時的な結論。

それは、“剣士”。

……それも…僕に近く、精神の鍛錬などではなく人を斬るための

武術を突き詰めた者。

服やズボンの上から窺える腕や脚についたしなやかな筋肉の質と量、そして左右の筋肉量の均衡。

一定の、乱れることのない歩幅。耳を澄ますと聞こえる、独特の歩法が奏でる軽快な音楽。

僕はそのほかにも多くの箇所、行動を観察し最終的な結論に至った。

おそらく、彼の使う武器は刃渡りがそれほどない刀剣類で、流派としては二刀流。

脚の筋肉の付き具合から鑑みるに、“戦闘すたいる”は反撃を軸に戦う“かうんたいすたいる”ではなく一瞬で敵の間合いに飛び込んで戦う“一撃必殺すたいる”。

……ただ、第一線からは去って久しいようで、仮に戦ったとしても遅れをとるとは思えないけど……。

彼から薫ぐかおくる武術の残り香、こればかりはどんなに時を経ても消えることはない。

そして僕は同時に考える。

『どうして、彼ほどの剣士が戦いから身を引けたのだ？』…と。



当然、僕の世界にも体の衰えや完治しなかった怪我を理由に軍を退役する剣士や魔法使いは居る。

だけど、得てしてそういう人々は、後進の育成に励む、武具店を開く、自身の戦いで培った魔法の叡智を書物として編纂する……といった戦場から程近い道に進む。

…理由は簡単。……どうしても戦いから離れられない。戦場での高揚を忘れられない。戦場から薫る死の匂いの誘惑に耐えられない。そして、……命を賭す戦い以外に生きる意味を見出せない。

僕だってソレは同じだ。短い間とはいえ、いまこうして平和な時を過ごしていると、夢の世界にでも迷い込んだ、あるいは半身を失ったような奇妙な喪失感が感じられる。

だからこそ僕は興味を引かれた。

彼が戦いから離れ、こんな風に喫茶店をやっていられる理由を知りたかった。

だから僕は

「お待たせしました。食後のコーヒーとデザートのカレーの翠屋特製シュー

クリームです」

デザートを配膳し、去ろうとした彼の背中に…殺意を…ぶつけた。

結果は、顕著だった。

去りかけた彼の動きがピタリと止まる。

「……お客様、ご用件は？」

「……聞きたいことが……あります」

「そうですね……。桃子、他の皆も、後の片付けは僕がやっておくから、もうあがっていいぞ〜！」

厨房に向けて放たれたその声に、各々から返事が返ってくる。

気配がひとつ、ふたつと離れて行き、残ったのは僕と彼の二人だけ。

「……すみません、気を使わせました」

「構わないさ、時間的にもランチタイムは終わりだから。皆もしばらく休憩時間だ。……それに、皆に聞かせられる話でもない」

「……そうですね。……僕に戦闘の意思はありません、どうぞお座りください」

「…では失礼するよ」

彼が僕の対面の席へと腰を下ろす。

「…僕の名前はジーク・G・アントワークです。好きなようにお呼びください」

「…ではジーク君で。僕は高町士郎。士郎が名で高町が姓だ」

「…じゃあ士郎さんということだ」

お互い、一片も気を抜かず慎重に自己紹介をする。握手などは交わさない、当然だけど。

「さて…、君がこの街…いや、この店に来たのは」

「…偶然です。…このように平和なセカイで、僕みたいな人間に出会って驚いています」

「それは私もただだね。娘と同じくらい年齢の子に、店でいきなり殺気を浴びるとは思ってもみなかった」

“僕みたいな人間”。明確に言わずともそう言うだけで分かり合える。

それはつまり、士郎さんも“僕みたいな人間”だったということの証左だ。

僕たちの間に沈黙が降りる。

それを破ったのは土郎さんだった。

「ジーク君、君は聞きたいことがあると言ったね。…それはなんだ  
い？」

「それは  
」

僕は “しゅーくりーむ” とコーヒーを頂きながらだけど。…非  
常に美味だった 戦いから身を引けた理由を問いかけた。

僕の質問を聞き終えた土郎さんが、ふむ。と腕を組む。

彼はしばらく沈黙し、口を開いた。

「…家族を愛しているから…かな。…君は誰かを好きになったこ  
とがあるかい？」

「無いです」

僕は即座に否定する。

王族に恋愛という概念も自由も存在しない。

国を安泰、発展させるために、隣国の見ず知らずの相手と結婚させ  
られる。

仮にも一国の王子だった僕にもそれは当てはまる。

『誰かと恋に落ち、愛をつむぎ、結婚する』

…そんなこと、夢のまた夢。それ以前に夢見ることさえない。

……だから僕は“人を好きになった”という経験もないし、それがどういうものなのか想像も付かない。

「それじゃあ分からないかもしれないな」

僕のその返答に、土郎さんが困った風な笑みを浮かべると、改めて口を開いた。

「……私は桃子…妻と結婚し、子供が出来てからも“そういった仕事”をしていた。……そしてその仕事の最中に怪我をし、しばらく生死の境をさまよった。そのあいだ妻はもちろん、家族に心配をかけた。一番下の…君と同じくらいの年の娘は親に構ってほしい盛りだったろうに、私の怪我のせいで構ってやれず随分と寂しい思いをさせてしまった。…だから私は怪我が治った後、“仕事”から身を引いたんだ。愛している家族に心配をかけず、一緒に暮らせるようにね。……これが私の戦いから身を引いた理由だ、納得できたかい？」

「……理由はわかりましたけど、理解は出来ません」

「そうか。…ま、いつかわかる日が来るさ」

そう言うと、士郎さんが席を立った。

会話はこれで終わり……ということだろう。

「……そういえば、君はいつまでこの街にいる予定だい？」

「……さあ？しばらく居ることになると思います」

時空の乱れは収まるどころか、徐々に強さを増してきている。

……こんな現象は、初めてだ。

「そうか。……話してみた感じ、君は悪い子ではなさそうだ。暇があったらまたおいで」

「……お金があったら来ます」

……暇かどうかである以前に、お金が無い。

先ほどまでとは違う、なんと言うか……非常に痛い沈黙が辺りを支配した。

「……元同業者のよしみで、コーヒーとデザートくらいなら半額で提供してあげるから」

同業者　僕は魔法騎士だから、恐らくどこかで見解の相違があるんだろう　じゃないけど説明が面倒だし、当たらずとも遠からずだろうから気にすることは無いだろう。

……というか、殺気がこもっているわけでもないのに、視線に痛み……もとい悼みを感じたのは……さすがに情けないなあ。と思う僕であったのだった。

翠屋を後にした僕は、今度は明確な意思を持って住宅街を歩いていた。

僕の手握られているのは土郎さんから頂いた、お店の外に置かれていた黒板に字を書くためのチョーク。

束で貰ったソレを使って、僕は一定の距離、一定の範囲ごとに小さな魔法陣を書き、それに魔力を込めると同時に隠匿の魔法をかけていく。

事故現場で感じられた3つの魔力反応。

それらといつどこで戦うやくり合う事態になってもいいように、準備をする。

『不測の、自然の状態での戦いでこそ真価が現れる』そういうやつもいるけど、僕に言わせれば大馬鹿だ。

常に最悪を想定して対策し行動する。戦いに身をおき、命を懸ける

者なら当然の行動だ。

そして、そんな風に道を歩いていたとき、大きな魔力の胎動が僕を襲った。

「ッ!？」

今朝調べた魔力と同質な、だけどもっと大きい反応。

場所も悪い、方向で言えば今いる地点の真逆。

……おまけにその地点までの道のりもわからない。

「…ああもう!」

今この時間はアリサが通う学校の終わる時間。  
もし帰り道でも出くわしたら不味い。

アリサに危害が加わらない場所や時間帯だったら無視するつもりだったのに…!

護衛として雇われている以上、不確定要素は潰す。徹底的に潰す

僕は意識、そして体を戦闘態勢へと昇華させた。

髪が白銀へと変貌し、自分ではわからないけど瞳が碧色に変化する。

僕は脚に力をこめると近くの住宅の屋根へと駆け上った。

穩行の魔法を使って姿・気配を隠しても、自身から発する音は消せ



ない。つまり、飛行魔法を使ったら風切り音で周囲の人間に不信感を与えてしまう。

だから僕は“飛ぶ”ではなく“跳ぶ”。

僕は屋根を蹴ると、魔力が発生した方角に向かって一直線に向かう。

屋根を飛び石代わりに、飛行ではなく跳躍で目的地へ。

……これなら道がわからなくても問題ない！！

僕は疾風のごとく空を駆けるのだった

08：なつかしい気配　そして　疑問（後書き）

…おかしいな。

これでアニメ1期編第2話が終わる予定だったのに……

いまだに主人公であるはずのなのはが登場できず……。

というわけでもう1話続きます。

余裕があれば、この後書き欄でSide・Alissaを書いてみようかと思ってみたり…。

ご意見ご感想を、誤字脱字報告をお待ちしています。

09：魔犬、出会い、そして……魔法使い（前書き）

予想以上に長い文章になりましたが、無事更新できました。

また、今話では、ジュエルシードを取り込んだ子犬が無残なことになるります。

そういったものに耐性のない方はご覧にならないほうがよいかもしれません。

では、お楽しみください。

09：魔犬、出会い、そして……魔法使い

09：魔犬、出会い、そして……魔法使い

空を駆けた僕は、十分もしないうちに魔力発生の目的地階下に到達した。

アリサに教えてもらった知識が正しければ、ここは神社。…この国独自の神を祭る一種の祭儀施設みたいなものらしい。そしてどこの世界でも同じく、祭儀場というものは周辺で最も高い位置に作られる。

だから僕は

「……なんでこんなことしてるんだろ」

ため息を吐きながら飛行魔法を使って石段上の神社に向かっていた。

……いや、だってね、面倒くさいでしょ。階段を駆け上るのは。というわけで、魔法の隠匿なんかより、楽なほうを選ばせて貰いました。わーい。

……考えてみればね、ここにはアリサのいる確率は低いんだよ。

帰りは鮫島がアリサを迎えに行くのが日課で、この山の麓には鮫島の車が停まってなかった。  
あんな事件があったことだし、アリサを一人で帰すことはまずあり得ない。

つまり、アリサがここに寄り道をしている可能性はほぼゼロ。

そう考えると、もうこれより上に行く必要はないんだけど、ここまで来たからには原因を突き止め、可能ならば……この憂さを晴らしたい。

「……原因め、覚悟しろ」

僕は不穏な気配を振りまきながら宙を翔け、ものの数十秒で階段の終焉へと到達し、そこで

「なのは！ レイジングハートの起動を！！」

「え？ 起動って何だっけ？」

「え……!?」

迫る魔獣の前に、あたふたしている一人の少女とその傍らに立つ（ちなみに2足歩行だった!!）人語を話す一匹の小動物に遭遇した。

「……………」

魔獣と少女と小動物、この3つを見て一瞬で判った………というか感じられた事。それは目の前の3つが僕が事故現場で命名した仮称

(小動物)、 (魔獣)、 (少女) だって事だ。

けど不思議なのは、事故現場で を倒したはずの が、なんとというか、間違つて戦場に迷い込んだ町娘ちつくな雰囲気………はつきり言えば違和感しか感じない。

魔獣と相對してるのに、氣迫………というか戦う覺悟が感じられない。

目の前の魔獣くらい呼吸するように容易く殺>やかれるからの余裕か、あるいはただ単に目の前の脅威を理解できないダメな奴なのか………間違はなく後者だと僕は断言できる。

とり合えず、目の前の少女と一匹を見殺しにするという選択肢は消えた。

目の前で死なれるのは気分が悪いし………それに どちらかということこつちが本命の理由だけど 着ている服が、アリサの通っている学校 私立聖祥大付属小学校。えすかれーたー式に中学、高校、大学があるとアリサに説明されたけど、いまだに僕は“えすかれーたー”と“えれべーたー”の区別が付かない。いいじゃないか、上下に移動する手段に変わりはないんだし……… の制服だ。

万が一アリスの知り合いだったら、彼女が悲しむかもしれない。護衛対象の“めんたる”面にも気を配るのが一流の護衛である条件らしい。これは一流の執事である鯨島が教えてくれたことだ。

というわけで残った選択肢は1つ。それは『元凶の排除』、……と  
いうことで

「……始末する」

“狩り”を開始した。

「ひゃっ!?!」

「うわっ!?!」

僕は地に足を着くと後ろから一人と一匹の間を駆け抜け、真正面から魔獣に接近した。

それと同時に頭の中で“獲物”の情報を整理する。

敵は魔犬型で小型 故郷には家一軒分の大きさの魔犬がいる種、4つ眼で口部には鋭い牙。注意すべきはその体躯と牙。

……そう、“ たった二つだけ”。  
そしてただの牙と体躯など脅威に値しない。

「…………ふん」

ゴキリ…！

「グオオオオオツ！？」

僕はただ自分の身体を強化し、自分の速さと近づく相手の速さ、その二つを拳に乗せて鼻面を殴っただけだ。  
吹っ飛んだのは明らかに僕より巨躯な魔犬のほう。感触からして、相手の顔面の骨は砕けている。

たかが魔犬相手に策なんて必要ない。ただ力で蹂躪する。

僕は、殴り飛ばされ未だ空中に浮かんだままのソレに対し、瞬動  
超高速移動する技。魔法というより体術に近い。でその吹き飛び方向に回り込むと、今度は下から突き上げるようにソレを殴る。  
魔犬なんてモノは足場がなければ何も出来ない、ただの肉の塊だ。

僕はそのまま瞬動を繰り返し、ソレを宙に浮かべたまま全方位から殴打する。

とり合えず、一秒間に八回を目安に拳を叩き込む。



四肢の骨を粉々に、体中の骨全てを最低一度折ったあたりで殴打は終了。

一瞬、宙で静止したソレに、僕は両手を組んで槌が如く振り下ろした。

「……………」

もはや何の声も発しないソレが、地面に叩きつけられ地面を陥没させる。

魔犬の返り血で両拳が紅い。

……剣を使つてれば、一瞬で頸を落として楽に“殺して”やれるんだけど、素手だからしょうがない。

ちなみにこの場合拳銃を使うのは論外だ。対人用の非殺傷弾で倒せる魔犬がいたら見てみたい。

「……………オオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！！」

…完璧に殺したはず。

だからこそソレがあげた雄たけびに、僕は眉をひそめた。

砕いたはずの骨が治り、粉碎したはずの四肢で立ち上がろうとする魔犬の姿。

「……その小動物、これは不死身の生物なのか？」

目の前の魔犬から目を離さずに、僕は一番状況を理解してそうな背後の小動物に語りかける。

……不死の生物なら、少々どころかかなり厄介だ。

「……い、いえ！おそらくその原住生物の体内に取り込まれたジュエルシード……魔力の核になっているものがその異常な回復力の原因です」

……何故か小動物の声が震えてるんだけど、僕何かしたっけ？

不死じゃないならそれに越したことはないね。

……それにしても、『核』か……。

僕は目を細め、注意深く魔力の流れを感じ見る。

普通るときよりも魔力に近い今なら、朝のように魔法を使わないでも魔力の基点探しくらい造作もなくできる。

「……見つけた」

「……は？」

間の抜けた小動物の声。

「核、見つけた。どうすればいい？」

僕は自分の言葉に補足を入れる。

知らないものにかつに手を出すとろくでもない目にあつのは常識

だ。

「え、えっと、核の位置がわかったなら封印を

「 やり方がわからない」

僕は小動物の言葉を遮る。

“じゅえるしーど？” ってものがどんなものかわからない以上、最適な封印が出来るはずがない。

「じゃ、じゃあ僕たちが封印しますから、その原住生物の動きを止めてください！……やり過ぎない程度に」

……殺>や<りすぎない程度？

……つまり半殺しにしろと？

……いまこそ拳銃を使おう。

下手に素手で殴るより、拳銃を使ったほうが確実だ。  
手加減を間違つて殺しちゃうこともない。

僕は異空間にある僕の倉庫 ……的確な説明が出来ない。……いつでもどこでも使える物入れって言えば伝わるかな？ から虚空に M92F>けんじゅうくを2丁取り出すと、両手で掴み取る。

練習が足りなくて、敵に弾を中てる確信が持てない。

……それならば、中てられる距離まで敵に近づけばいい。

僕は地を蹴ると、再度魔犬に肉薄した。

ガガガガガン！！

魔犬の喉笛、そして腹部に零距离から連続して銃弾を叩き込む。殴っていたときの感じだと、そこが一番肉質が柔らかい。

大砲を撃ったあのような、硝煙の臭いが鼻に付く。

魔犬の体軀を紫電が奔り、その動きを停めた。

そして

「な、なのは！封印をー！！」

「う、うん！レイジングハート、セツトアップ！………リリカルマジカル、ジュエルシード、シリアル？？。…封印ー！！」

戦いが、終わった。

「…あ、あの」

戦いの後の虚無感を味わっていた僕は、背後からの少女の声に振り向いた。

「ん？」

「ひい！？な、何でもないですっ！！」

何でもないと言うわりに、その少女の顔は恐怖に歪んでいる。

「…いや、ホントになんでそんなに怯えられてるんですか、僕は？何かしたっけ？」

「え、えつとですね、とりあえずその手や服、顔に飛び散ってる返り血と質量兵器がなのは怯えさせてるので、どうにかしていただけると……」

「…あ」

小動物の指摘に、僕は間抜けな声を上げる。

「……盲点だった。」

両手、そして体中が返り血に染まって、なおかつその手には鈍く輝く鋼鉄の武器。  
そしてさらには無表情。

………確かに客観的に見るとかなり恐怖を与える姿だ。

僕は銃をしまうと、布を取り出して返り血をふき取る。

乾く前にやっておかないと、こびりついて落ちにくくなってしまう。

ふきふきふき…と

「………落ちた？」

「は、…はい」

少女が頷く。

「………貴方は、現地の魔導師の方でしょうか？ 僕の名前はユーノ・スクライアといいます」

「あ。わ、私は高町なのはです!!」

「（………魔導師？）………声が大きい」

僕は小動物の言葉に違和感を覚えつつも、それを表情には出さない。

「ひいっ!?!ごめんなさいごめんなさいごめんなさいっ!?!」

「……………ジーク・アントワークだ」

…よく判らないこいつら相手に、『G』の名を教えたくはない。

……………僕にとって大事なものだ、『G』の名は。

……………それにしても、僕は悪くないはずなのに、そこまで怯えられるととても傷つく…。

「……………えっと、じゃあ、ジーク…君?」

「…気安く名前で呼ぶな」

「ひい!?!?」

「……………僕はここの魔法使いじゃない。この場に来たのもただの気まぐれ」

僕は話の通じそうな小動物のほうの問いに答えてやる。

「そうでしたか……………。このたびはご迷惑をお掛けし、誠に申し訳ありませんでした」

「問題ない。確認したいことが合ったから来た、謝まらなくていい……………じゃ、僕は帰る」

この神社の高さから飛べば、下の人たちに見つかる可能性を限りな

く低く出来る。

地を蹴りかけた僕を、少女が呼び止めた。

「あ、あの！よかつたら一緒にジュエルシード探しを手伝って

」

「やだ。手伝う義理はないし、こっちにだって仕事がある」

「でも

」

「なのは！！………すみません、無理を言ってしまったって……」

礼儀正しい小動物…ユーノって言ったか。

僕は認識を改めながら頷いた。

「………仕事の障害になるようだったら手を貸す。それ以外は勝手にやってくれ」

「いえ、それだけでもありがたいです」

「ん、ユーノは名前で呼んでくれてかまわない。………じゃ、ユーノ………あとついでに少女Aも、また機会があれば」

「し、少女A！？ その未成年犯罪者の名前みたいなのはイヤなの  
！！ 私は、た・か・ま・ち、な・の・は！！！」

「………うるさい黙れ静かにしろ」

騒がしい少女を睨みつけて黙らせる。

僕は地を蹴ると空へと舞い上がり、一匹と一人から離れると、アリ



サの家、視力を強化したらすぐに見つかった。へまっすぐ翔けるのだった。

時は流れて、夜。与えられた僕の部屋。

夕食を食べ終えた僕とアリサは机に向かっていた。

何をしているのかと言うと

「はい、ジーク、次はこれを日本語に訳しなさい！ 『I am home.』」

「アリサ、僕を馬鹿にしてるのか？ 『私はホメです』でしょ？」

「んなわけないでしょうがっ！？ 誰よホメって！？ なんで『私は家です』っていうベターな間違いじゃなくそんなぶっ飛んだ解答になるのよ！？ 『私は家にいます』っていう意味よ！！」

英語の勉強である。

日本語 ひらがな、漢字、基本文法は網羅した。カタカナ語は…  
鋭意努力中 の勉強がひと段落した僕は、新たな言語に食指を伸

ばしていた。

「はい、次！ 次の会話文を英訳せよ『ごめんなさい。僕は英語がしゃべれないんです』」

「えーつと、『Sorry. I can't speak English.』。……………アリサ、その問題文おかしい。なんで英語がしゃべれないことを英語で謝ってる？」

「……………問題文がおかしいわね」

「あとこれも。…次の英文を和訳せよ『The cat's name is Mike.』。『そのネコの名前はマイクです』が正しいんだろうけど、一緒に書いてある図が三毛猫なだけど。……………『そのネコの名前はミケです』の方が正しいと思う」

「……………ジーク。この国の英語教育は色々と遅れてるのよ、きっとアリサが学校で使っているという英語の教科書をパタリと閉じると、そのまま僕のベッドに倒れこんだ。

「……………今日の授業はここまで」

「ん、わかった」

僕はノートとペンをしまおうと 言葉に自然とカタカナ語が混じっている。これが僕の努力の成果だ！！ アリサの隣に倒れこんだ。

「……………それにしてもジークってなんだかんだ言って理数系は散々だったけど語学に関してはかなり優秀よね。日本語の勉強を始めて

からたつた数週間で英語の勉強に入れるなんて。教えるほうも結構楽しいわ」

「……………アリサの教え方がいいから」

先生役をやれるアリサの能力がすごいんだと思うけど…。

「……………」

「……………」

その会話を最後に、お互い何とは無しに黙ってしまい、僕たちの間に沈黙の帳とぼりくが降りた。

チラリ、隣に目をやると、同じくこっちを向いたアリサと目が合っ  
てしまう。

「…な、なによ」

「……………な、なんでもないよ？」

…この戦場でも感じたことがない焦りは何だろう。

「そ、そくだ！ 今朝言ってた魔力の件はどうだったのよ」

「え、ああ、うん。このセカイの魔法使いに会った。小動物に連れられたアリサや僕くらいの女の子」

「……それって逆じゃないの？ 小動物を連れた魔法少女じゃなくて、小動物に連れられた魔法少女って……」

「……だって、小動物のほうが無能そうだったから」

それを聞いたアリサがなんとも不憫そうな表情を浮かべた。

「ちょっとその子に同情するわ……」

「…事実だし」

僕は少女A 名前を覚える価値は無さそうだった を思い出し、  
内心でうなずく。

あの少女は、魔力が水のように満ちた水瓶みたいな存在。

戦場に立つ器じゃない。

「まあいいけど……どんな子だったの？」

「アリサの学校の制服着てた……割には頭が良さそうじゃない子」

「……魔法って実はとっても身近な存在なのかしら。……それにしてもそこまで言われて……ホントに不憫な子……」

アリサはちょっと顔をしかめた後、遠い目をして見も知らぬ少女に向かって憐憫の情を向けていた。

ただしそれはほんの刹那のこと。

アリサがいきなりベッドから飛び起きた。

その表情は爛々と輝いている。

「……………どしたの？」

僕も身体を起こし、アリサに頸を傾げた。

「ジーク！ 私たちのこの世界にも、貴方みたいなイレギュラー以外にも魔法という理>ことわり<は存在する…そうよね!？」

「……………断言は出来ないけれど、状況を鑑みるに、恐らくは」

「で、ジークの見立てだと、その子は魔法ってモノに慣れてない…  
…つまり、少し前までは魔法の存在を知らなかった。それから推測  
できるのはその子が生粋のこの世界の人だったって事！ どうして  
魔法が使えるようになったかは判らないけど、それは元々この世界  
の人間にも魔法を扱えるだけの素地が有ったってことよね!？」

「……………もしかして、アリサ……………」

僕はようやくアリサの言わんとしていることを察した。

そしてそれは

「ジーク、あなたは私に魔法を教えなさい!!」

僕の想像を裏切らないものだった。

## 09：魔犬、出会い、そして……魔法使い（後書き）

後半の英語ネタの一部はkeyのRewrite体験版からの借用です。

自分、鍵っ子ですのでww

猫に関しての英文は、中学校時代に実際に出題され、物議をかもした問題ですww

アリスに魔法使いのフラグが立ちました。

念のため言っておきますが、なのは的な『魔導士』ではなく、別口の『魔法使い』です。

また、主人公のセリフへ徐々にカタカナ語が混ざり始めました。彼の進歩にご期待をww

なのはの扱いが酷い件……仕様です

では、また次話でお会いしましょう。

ご意見・ご感想をお待ちしております。

おまけ

Another Side

「ジークが少女Aなのはの話をしてたころ」

「へくしょん!!」

「わ!? なのは、大丈夫? カゼでもひいた?」

「引いてないと思うんだけど…。誰かにウワサでもされたのかな?」

「? この世界の人たちは、自分がウワサされるとくしゃみが出るの?」

「うーん、昔からそういわれてるけど迷信みたいなものだからか」

「へくしょん!? ひ、ひた(舌)はんだ(噛んだ)〜?!?!?」

「なのは〜!?!?」

おしまい

**10：魔法使いの弟子、過去の記憶、そしてシヨツピングへ（前書き）**

更新が1か月近く滞ってしまい、申し訳ありませんでした！！

レポートが大量に出され、その始末に奔走しておりました。

暇を縫って書き進め、無事更新と相成りました。

では、アニメ版1期第3話前編をお楽しみください。



10：魔法使いの弟子、過去の記憶、そしてショッピングへ

10：魔法使いの弟子、過去の記憶、そしてショッピングへ

草木も眠り始めるそんな時間、僕とアリサはまだ眠りに落ちてはいなかった。

「ん〜！！」

「……肩にそんなに力を込める必要ない。力を抜いて、呼吸するよ  
うに」

アリサが僕に魔法の指導を頼んでから数日。

僕たちの間には一定のサイクル、そしてそれまでの倍以上の共に過ごす時間が増えていた。

夕食を食べ終えた後、ちよつと時間を置いて、アリサを先生役に僕の語学の勉強が始まる。

決められた勉強が終わると、今度は僕が先生、アリサが生徒になって魔法の勉強。

そんなわけで、必然的に僕とアリサの共有する時間は倍増していた。

「……で、出来たわ！ これはどう!？」

「……10点」

「き、厳しいわね」

今は僕の指導時間。

練習している魔法は初歩の初歩、物体を飛行させる魔法だった。

水の入った1.5Lの“ペっとぼとる”　　ぷらすつちく？　を加  
工して作るとか……。そのぷつすらちく？も、地面を掘ると出てく  
る燃える水が原料とのこと。……。恐るべき発想だ　　を浮かばせて  
いるのだけど、そのぺっとぼとるはあっちにフラフラ、こっちにフ  
ラフラといった感じで、空中に固定できてない。

……率直に言わせて貰うと、とても危なっかし

「……!？」

とっさに伏せた僕の頭上を、風斬り音を立てながらペットボトル

……現地語っぽく発音できた！　　が通過した。

「きゃっ!？　じ、ジーク!？　だいじょぶだった!？」

「……なんとか。……ちょっと、休憩にしよう」

……訂正、非常に危なかった。

「アリサはどんな魔法使いになりたいの？」

鮫島が淹れてくれたお茶を飲みながら、僕はアリサに尋ねる。

「え、どんな魔法使いになりたいか？ …… RPGとかのジョブ的な意味で？」

アリサが学校に行ってる間、この世界の文化を研究するために色々している。

ゲームもその一環だ。

…そして、自慢じゃないけど『高 名人の冒険島』をノーミスでクリアした。

宇宙からの侵略者を倒すゲームでは“名古屋撃ち”もマスターした。連打能力測定器で秒間60連打を記録した。

格ゲーで一度空中に浮かんだ敵に、そのまま連撃を加えて倒す空中殺法もこなせる。

蛇のおじさん进行操作するゲームではノーキル&ノーアラートで全クリ。

東方ってゲームのEXTRAも、戦闘で鍛えた動体視力と先読みのおかげで弾幕の美しさを愛でる余裕さえある。

僕に死角は無い。

「ん、F とかドラ エとかの職業的な意味で」

この世界は科学が発達してるのに、非現実（2次元）の世界では『リアル

魔法』の存在を肯定している。

この事から、以前この世界には確かに魔法文化が有ったのではないかという仮説が立てられるのではないか。

……非常に興味深い。

話を戻そう。

「そうねえ……。……賢者？」

「……アリサがもし賢者に成れたとしても、僕がプレイヤーだとしたら、総魔力量的に勇者のパーティーから外すよ？」

もっと手厳しく言うなら、勇者のパーティーに加入した当初は、そこそこパラメーターが高いから使ってもらえるけど、そのすぐ後に入ったメンバーに出番をとられるような扱い。

……実を言うと、アリサの魔法の資質を調べたとき、総魔法量が中の中から中の上くらいだった事に、僕は言いようのない安心感を覚えた。

強い素質を持つ者は、必然的に争いへ巻き込まれる。

………「」の僕のように。

「く……、才能のない自分が悔しいわ……！」

僕は内心のそんな想いを隠し、口を開く。

「……………その言葉、僕以外の人の前で言わないほうがいいよ？」

…アリサの『才能がない』なんて言葉は、世間一般の人が聞いたらただの嫌味だと思う。

「……………ま、いいわ。貴方に会えなかったら魔法になんて一生出会えなかったと思うし。……………ありがと、ジーク」

「…お礼はいらない」

「……………それにしても賢者はムリか、ざくんねん」

本当に残念そうなアリサを見るうちに、僕はいつの間にか新たに言葉を紡いでいた。

「…決して魔法使いとして大成できないって意味じゃ無い」

「え？ どういうこと？」

「…ん。アリサはゲームの賢者みたいに、大魔法・高位魔法をバンバン、全体全回復の魔法をジャンジャン使えない。…だから、自分にあった使い方で巧く魔法を使えばいい」

僕はそう言いながら、練習用に使われていたペットボトルの一群

総数24本。別名2“だーす”とも表現できるらしい に向ける。

使うのは、アリサが練習していた純然たる、対物飛行魔法。

そして、その行き着く最高峰。

ペットボトルが一糸乱れぬ動きで均一な高さ、距離で虚空に固定される。

「アリサ、動かないで」

僕はまっすぐ向けていた手のひとさし指を『くい』と曲げた。

その瞬間

「ひゃッ!？」

24本の容器が各々別の鋭角的な軌跡を描くと、瞬きをする間もなくアリサを全方位から殺到し包囲する。

「…これがアリサのさっきまで練習してた魔法の行き着く終着点。複数のものを同時かつバラバラに、それを高速で飛ばせるだけで有効すぎる攻撃手段。…：現に、僕の師匠の一人はこの魔法と剣技だけで大陸中に名を馳せてた」

最強の双剣士と呼び名の高かった師匠。

剣技だけ…と条件をつければ、僕でさえ一閃のもとに切り伏せられる。…それほどの腕だった。

不利な戦局を一瞬でひっくり返すような大魔法は当然ながら、戦場で戦う剣士に最低限必要とされていた筋力強化の魔法でさえ使えなかった師匠に、唯一使えたこの魔法。

彼はこの魔法を極め、その魔法と己が両手の剣だけで戦乱を戦い抜いた。

空を駆ける無数の剣群を従え、蒼銀と紅銀の双剣を手に真つ先に敵陣に切り込んで敵に恐怖を、味方に勢いを与えるその姿。

敵味方を通して呼ばれた二つ名は“剣爛武踏”。

……そして、あの悪夢の日、最後まで国民を背に戦い続け、……  
僕の魔法でその生涯を終えた。

酒癖は悪かったけれども、守るべき民の笑顔を見るのが大好きな人だった。

「……………」

「…えっと、ジーク……。とつても辛そうだけど、…大丈夫？」

……そんな表情を浮かべてるつもりは無かったんだけど、アリサが

そう言うなら本当なんだろう。  
だけど、僕はそれを否定する。

「……気のせい。…アリサ、今日の練習はこれでお仕舞い。明日は朝から…サツカー？ とか言う運動の試合を見に行くんでしょ？  
……もう寝たほうがいい」

「あ！ 明日はすずか達と試合見に行くんだっけ！！ ……明日はジークも一緒に来る？」

「ん…行かない。午前中はちょっと家でやっておきたい事がある」

「そ、解ったわ。午後からはパパと一緒に買い物に行くから、そのときには付き合いなさいよ？」

僕はコクリと頷く。

アリサはそれを見て、満足げに首を縦に振ると「ジーク、おやすみ」と言っ僕の部屋を後にしていった。

アリサの気配が遠ざかっていくのを確認して、僕はため息を吐く。

「辛そう……か」

僕はのろのろとパジャマに着替えると、魔法で何処からともなく一本の酒瓶を取り出し、一緒に出したグラスになみなみと注ぐ。  
中身は“火の酒”とも呼ばれる非常に度数の高い蒸留酒だ。

魔法の触媒>カタリスト<にも使われるソレを、僕は一息に呷>あお<った。



熱いソレが喉を焼く一瞬を耐えると、僕はベッドに潜り込み、固く目を瞑る。

僕は、こうして一度>ひとたび<故郷の人を深く思い出してしまつと、酒精に頼らなければ眠れない。

こうすれば、いつの間にか意識が途絶え、いつの間にか朝が来る。

そう、…こんな風に……意識が……闇に……飲まれ……て。

「……いつてらっしやい」

次の日、僕は鮫島の運殿する車で出て行くアリサを見送ると、その足でデビッドさんの元へと向かう。

「おはようございます」

「うん、ジーク君、おはよう」

コーヒーを飲みながら新聞 昨日の出来事が次の日には国全体に伝えられる。……すさまじい情報網だ を読んでいたデビッドさんが顔を上げ、僕に笑顔を向けた。

僕はそれに頷き返すと、デビッドさんに話を切り出した。

「デビッドさん、頼みがあります。僕に拳銃以上の火力を持つ銃器の保有許可を下さい」

「……ふむ、詳しく話を聞かせてもらおうか」

デビッドさんが、新聞を畳むと、僕に視線を向ける。

僕は昨日の神社での出来事を掻い摘んで話した。

この街に起こっている異変とその原因である青い宝石“ジュエルシード”、昨日の魔犬、そして僕以外の魔法使いの存在を。

「……つまり、非殺傷のSRゴム弾では相手にダメージを与えるのが難しく、アリサのガードに支障をきたすと？」

「そう。人間用の弾じゃ、ダメ。それに、魔法使いもいる。障壁を張られたら、普通の弾丸なんて徹>とおくらない」

……殺していいというのなら、楽なんだ。

素手だろうがなんだろうが、障壁の可能防御力以上の力で攻撃すればいい。でも、そんな硬い障壁を破れる力で殴られたら、魔法使いだろうがひとたまりもない。

僕は言葉を続ける。

「障壁だけなら、弾丸に対障壁用の術式を埋め込めばどうとでも出来る。問題なのは魔犬なんか問題じゃないほどの防御力を持った魔法生物が出てきた時。いまの武器じゃ、アリサのそばから離れないでどうにかするのはムリ」

魔犬と言っても所詮は“犬”。

飛竜>ワイバーン<や岩人形>ゴーレム<、機械人形>オートマタ<が出てきたら拳銃の弾丸なんて、子供の投げる小石みたいなものだ。

牽制の効果もない。

言いたいことを言い終えた僕は黙ってデビッドさんを見つめた。

視線を伏せ、思案に耽っていた彼は一つ大きなため息を吐くと、僕と目を合わせた。

「……………いいだろう。ただし、人間にはこれまで通りSRゴム弾の拳銃を使用すること。……………これ以上は譲歩できない」

「それで構わないです。……………じゃ、ちょっとアメリカまで銃の入手に行ってください。アリサと買い物に行くまでには戻ってきますから」  
デビッドさんの前から辞すと、僕は以前作成したアメリカ直通の魔方陣を発動させ、単身アメリカに降り立ったのだった。

アメリカから無事帰国？した僕は、アリサ、デビッドさん、お供の鮫島と一緒に買い物に出かけていた。

其の一　　〽　ケータイを買おう！！　　〽

「…………ケータイ？」

「そう、ケータイ。アンタは仮にも私のボディガードなのに、私からの連絡手段がないのはマズいでしょ？　どんなのがいい？」

アリサの言葉に、僕は周りを見回す。

『ケータイ』と呼ばれるものが周りにたくさん置かれてるけど…………正直、どれがどう違うんだか解らない。

「…………そういわれても」

「……………あー、確かにそうよね。…………ジーク、それ以前にあなたケータイってどういうものかは解る？」

僕はアリサの言葉に力強くうなづく。

「当然だよ、この世界の文化はテレビとか見て勉強したんだから。……ボタンを押してベルトに着けると、ライダーになれるんですよ？ しかも遠く離れた相手と話せる機能がおまけで付いてくるすごい機器」

「ちがーう！！ そんなケータイは日曜の朝の30分だけにしか存在しない架空のものだから！！ それに通話機能はおまけじゃないから！ むしろメイン機能だから！！」

「そんな馬鹿な！？」

この世界の科学力なら普通に存在してると思ったのに……！！

「……まあ、早いうちに気づけたんだから良しとしましょう」

「………アリサ、ということは、バイクが人型に変形して一緒に戦わないのか！？」

「そのネタはもういいから！！」

………夢も希望もない……。

「………選ぶのは、アリサに任せる」

「………それが一番無難そうね。………じゃ、じゃあ私も機種変して、あんたと同じやつの色違いにするから！」

「え？　なんで？　まだ使えるのに新しいのにするの？」

「ケ、ケータイってのはそういうもんなのよ！　そ、それにほら、同じケータイならあんたにも使い方教えやすいでしょ！！　けけけ決してジークとお揃いがいいとかじゃないんだからね！？」

僕はアリサの言葉に首をかしげた。

「……………おそろいに何か意味があるの？」

アリサが薄っすらと頬を紅くしたまま、表情を引きつらせる。

「……………ふん！」

アリサに向こう脛>ずねくを全力で蹴り貫>ぬくかれた。

……………正直、死ぬかと思うほど痛かったです。

其の二　　服屋さん

「さて、次はアンタの服ね、服屋さんに行くわよ！！」

「……………仕立て屋さんに来てもらうんじゃないのか？」

僕は首をひねる。

「……アンタはどういう世界の住人だったのよ？」

いや、確かに僕は王族だったけども

「……普通じゃないの？ 僕の居たところでは、肌着の類を除けば新しい服を買ったしたら王族だろうが庶民だろうが、服は採寸を取ってもらってから作るんだよ？」

仕立て屋が城まで来てくれる。という点を除けば一般庶民と同じはずだ。……たぶん。

「そんな非効率なことがあるわけ」

「いや、恐らくジーク君の言っていることは真実だ」

再度否定しようとしたアリサに、話を聞いていたらしいデビッドさんが会話に入ってきた。

「え、パパ、どうして？」

「うむ、話を聞いた限りだと、ジーク君の居た世界は我々でいう中世ヨーロッパぐらいの文化水準だと考えられる。その時代には当然化学繊維は存在しないから、服の原料は必然的に麻や木綿、絹といった物が主流だろう。それらは化学繊維のように大量生産も出来ないから、在庫を作り万人に対応できるようにしたのではなく、その

都度注文に応じて製作するというのがデフォルトだったんじゃないかな？」

「……ところどころ解らないところがあったけど、たぶんそれで合ってます」

“服”あるいは“布”というのは貴重品だ。

着れなくなった服は、古着屋に持って行って大きさを手直ししてもらったり、古着屋に売ってそこで新しい古着　古いのに新しいって変な表現だ　を買うのが普通。

僕は王族という立場上、他国に対して最低限の体裁を保たなきゃいけないから新品ばかりで“古着”には縁がなかったけれど、そういった物流があることは教わっている。

擦り切れて着れなくなった服も、ただ捨てるのではなく雑巾として最後まで利用する。

布というのは、農家の方々の血と汗の結晶なんだから。

僕はそういったことを掻い摘んで二人に説明した。

「……消費社会に生きる私達には耳が痛い言葉だな」

「……今度から買い物ときは無駄なものを買わないよう注意するわね」

微妙な雰囲気の中に、僕は首を捻るのだった。



其三　〜ペットショップにて〜

「……ま、足りないのはこんなところかしら。……ジーク、私はちょっとお会計に行ってくるから、このあたりで待っていて」

「ん、わかった」

アリサを見送り、僕は周りを見渡す。

このお店は動物の飼育品などを扱っているお店らしい。

アリサの家にたくさん居る犬達用の物を買いに来たみたいだけど、細かいところは解らない。

……この世界の文化ならともかく、犬のことまではさすがに勉強していないし。

僕は、なんとは無しに周りに積み上げられているカンヅメ　金属の器に食物を入れて密閉すると、年単位で保存が利くらしい。これを聞いたときには身体に雷が落ちたかのような衝撃が走った　　を手に取り、描かれている絵を見て硬直した。

描かれていたのは

「……ま、まさか……！？」

犬の絵だった。

僕は、カンヅメというものを知った際、鮫島に色々と聞いてみた。そして解ったことの一つに、『カンヅメの表に描かれている絵は、中身が何かを表すモノ』という事実がある。

……………その事実から導き出すに、このカンヅメの中身は、犬の肉。

……………この世界の人間は犬を食べるのか!? 人類の古くからの友人である犬を!?

僕は驚愕の事実により身体を硬直させた。

同時に僕の頭の中で恐るべき推測が立っていく。

……………アリサは犬をたくさん飼っている。もしかそれは食用? あの犬達に向ける目は、仲間や家族に向けるものじゃなく、自分の血肉になるモノ達へだったのか!?

「……………ア、アリサ、なんて恐ろしい子!」

僕は久しぶりに戦慄が走ったことを自覚するのだった。

「ちょ、イヌの、カンヅメなんてッ……そんな発想、誰も…わ、笑  
いすぎて、お腹が痛いわ……!!」

「ア、アリサ、そこまで笑ってやるな、ジーク君は大真面目なんだ  
から……ブフッ!!」

「…………ツ(恥)」

帰りの車中、意を決して質問した僕は、アリサとデビッドさんに爆  
笑されていた。

「真面目な顔して、何を言うのかと思ったら、『アリサ、この世界  
ではイヌを食べるんだな!!』って」

「さ、さすがにその発想はなかった!! こ、こんなに笑ったのは  
いつ振りだろうな!」

……穴があつたら入りたい。

「……そんなに気を落とす必要はありませんよ、坊ちゃん。誰にだ  
って勘違いはあるものです、今こうやって間違いに気づけたのだけ  
ら、良いではありませんか」

「…………鮫島」

……運転席からバックミラーを通してやさしく諭してくれた鮫島が、

神様に見えた。

「鮫島、ありがッ

」

瞬間、首筋に走る怖気。

戦場から離れた今でも本能的に危険を知らせるこの“嫌な予感”は、何度も僕の命を救ってきた。

僕は脊髄反射で鮫島に告げる。

「鮫島！！ 車を脇に寄せて！！ 早く！！！！！！」

「！？ はい、坊ちゃん！！」

躊躇はほんの一瞬、鮫島は僕の剣幕にただ事ではないと察したのか、すぐさま路肩に車を停めた。

「…ッ、ジーク君、何事だ！？」

「いきなりどうしたってい これ……地震？」

混乱から我に戻ったアリサのつぶやき。確かに車が、街が、大地が揺れている。

「ただこれは地震なんかじゃない、魔力によって引き起こされたナニカ。」

「…まあ無理もないと思う、魔法に触れてまだ少ししか経ってないんだから。」

「……だけど、長年空気と同じように魔力と触れてきた僕には、明らか

かな違和感として感じられる。

……そして、これと同じ魔力と、僕は神社で相對していた。

ソレは

「ジュエル……シード……!!」

青い宝石の、魔力だった。

11：敵性存在&失くしたモノと、手に入れたモノ（前書き）

前話の投稿から大幅に間が開いてしまいました、誠に申し訳ありません。

他作品の執筆や、レポート・期末考査などに手間取ってしまったのが原因です。

大学の夏休みももう少しで終わり、時間が取れなくなりますが、頑張って連載を続けていきたいと思えます。

11：敵性存在&失くしたモノと、手に入れたモノ

11：失くしたモノと、手に入れたモノ

ジュエルシードの魔力を感知した後の、僕の動きは素早かった。

瞬時に僕の髪が白銀に、そして眼は碧く変貌する。

「天に煌々きらくめく星々の加護を以て、彼々かくの者たちを守護の環の内に……八天方陣」……！！」

即座に発動できる防御魔法の中で、最も硬いモノを発動させる。

……古竜の一撃すら防ぐ魔法なんだけど、瞬間消費魔力が多いのが欠点だ。

全周囲に障壁が張られた魔法が、地面の振動から車を切り離す。

「これは……！？」

「……収まったの？」

「一体……なにが……？」

「……ちょっと待ってて」

一変した周囲の景色に唾然とする運転席の鮫島と、状況が解らず混乱しているアリサとデビットさんに告げて、僕は未だ揺れの収まら

ない車の外に躍り出た。

「……………これは……………樹の根？」

安全な障壁の内側から、現在進行形で周囲に起きている異変に目を向けた僕は、この現象の効果範囲に動きを止めざるをえなかった。

街の中心に、いきなりそびえたつた異様なほどの大きな大樹。

それから枝分かれし、街中に生えた、少し小さな大樹？ 『小さな大樹』……………この大樹なのに小さいっていう表現がおかしいのは自覚しているけれど、それ以外の的確な言葉が見当たらない に、当然のように付随する、これまた巨大すぎる樹の根。

キレイに舗装されていた道路は、隆起した根によって無残にも破壊されている。

木々は、街の中心部の半分以上を飲み込んでいた。

僕は周囲の安全を確認すると、コンコンと窓を叩いて半分くらい開けてもらう。

「ジーク！ 外の樹はいつたいなんなのよ!？」

……………こういった非常識な状況に慣れていないから、こんな質問が出るのかな？ と僕は思う。



僕の故郷だったら、原因不明の現象が発生したら、皆がとり合えず全力でその場から離れる。

……それが一番自分の命を守れる方法だから。

「……最近街で起こってる魔法現象が原因」

実のところ、アリサにはジュエルシールドのことは伝えずに、『原因不明の魔法現象』という風にぼかして伝えてある。アリサに真実を語るうものなら、自ら赴いて解決するといいいかねない。

対してデビッドさんと鮫島は冷静さを取り戻している、…流石だ。

「転送魔法で、車ごとアリサの家まで送る。そしたら家でじっとしてて」

僕は話しながら取り出したチョークで車の周りに魔方陣を書き込んでいく。車一台と、人間3人を転送する都合上、魔方陣が巨大、かつ複雑精緻になるから、多少手間がかかるのはしょうがない。

「ジーク君、君は!？」

「……あれを始末したら帰る」

「ちょ!?! そんなの自衛隊にでも任せて、私達と一緒に戻りなさい……!」

「……それは出来ない相談。こういう広範囲魔力現象は、早く手を打たないと際限なく拡大する。今は街の繁華街あたりで収まっていけるけど、このままじゃずっと離れたアリサの家のほうまで拡大するかもしれない。……そうになったら最悪、そこまで大きいと手が着けられない。……僕の仕事はアリサを守ること。この場合、最善の一手は、アリサたちをこの場から逃がして、アレの手がつけられなくなる前に決着をつける」

デビッドさんとアリサの声を聞き、返事をしながら、僕は魔方陣を完成させる。

「しかし、だからと言って君を危険な目には」

「デビッドさん、危険じゃない戦いなんて、無いです」

僕の言葉に、何かを言いかけたデビッドさんの動きが止まる。

「じゃ、じゃあ私も残る！！ 私だってちょっとは魔法を使えるんだから」

「あのレベルの魔法じゃ戦闘になんて出せない…… 鮫島、車のドアをロックして。アリサが出てこられないように」

ガチャリ

瞬間、車内で伸ばされたアリサの手より早く、鮫島によって運転席からドアに鍵がかけられた。

「っ！？ 鮫島、開けなさい！！」

「……申し訳ありません、アリサお嬢様。バニングス家の執事として、お嬢様や旦那様を危険に晒す手助けはできません」

……鮫島が僕の見込んだとおりの人でよかった。

“家”に仕える人は、“家”の人間のためならば、身内ですら切り捨てられなきゃならない。

……まったく違うこの世界でも、それだけは変わらなかった。

「じゃあ、転送する。家に着いたら、屋敷の中に籠もってて。屋敷には、僕の魔力に依存しない形式の対魔結界が張られてるから、万が一のときは……自衛隊？ が来るまで持ちこたえて」

僕は簡単に指示を出すと、転送魔法を発動させる。

「……ジーク坊ちゃん、申し訳」

深い悔恨に包まれた鮫島の表情。

「……ジーク君、無理はしな」

こちらを深く心配する、デビッドさんの顔。

そして

「ジークのバカバカバカバカ！ 帰ってきたらタダじゃ

」

怒り、悲しみ、悔しさ、辛さ、恐怖、様々な感情全てがな  
い交ぜになったアリサの顔。

何かを言い切るより先に、三人が乗っていたリムジンと共に姿を消  
した。

「……………行くっ」

僕は頭を振って、寸前の光景を意識から外すと、地を蹴って空へと  
翔けた。

空から巨大な樹を見下ろしながら、僕はこの状況をいぶかしんでい  
た。

これほどまで大きな魔術を発動させるとなれば、かなりの下準備が必要なはず。ただ、今日街を見てまわったけど、そんな残滓は微塵も感じられなかった。

……もしこれが“ジュエルシード”単体で下準備なしに引き起こされたものだとするなら、……僕はジュエルシードに対する見方を変えなくちゃいけない。

「……………ふッ！」

僕は頭の片隅でそんな思考をしながら、素手で手近な細さの枝に攻撃を加えてみる。

鈍い音と共に枝が折れるが、樹は何の反応も示さない。

折れた部分が修復されるでもなく、攻撃を加えた僕に対する排除行動も起こさない。

異様な大きさという一点を除けば、これはただの樹木。

僕はそう結論付けた。

同時に対処方法を模索する。

さすがにこれだけ大きいものが対象だと、個人で取れる行動はどうしても限られる。

僕はいくつか上げた案を吟味し、最終的にそれを一つに絞り込んだ。

その案とは、前回魔犬を相手にしたときのように、術式の核を見つけ、それを封印する手段。

ただ、範囲が広すぎるから、前回みたいに簡単に核は見つけられない。

時間をかけて見て周れば見つけれらるだろうけど、今回はそうも言  
つてられない

だから僕は

「……………御代はここに置いておきます」

自分の“眼”の代わりになるものを作りあげる。

僕はさつきまでアリサ達と居たお店 ショッピングモールとか言  
うらしいけど に行つて、円状に巻かれて売られている針金を手  
に入れた。

この騒動のせいで、お店の人も居ないから、お会計の場所にお金を  
置いておいた。

火事場泥棒は僕の尊厳が許せない。

店を後にした僕は、針金を手に持ち、唱える。

「『……貴方にイノチを授けましょう、仮初>かりそくめなれど、気高く、清く、聖なるものを。鋼の身体>からだくに鋼の翼、鋼の魂をその身に宿し、我が下に馳せ参ぜよ』」

魔力を込めた言葉。詠唱の途中から、針金の先がスルスルと伸びていき、最後には鋼でかたどられた、本物の半分くらいの大きさの鷹>たかくの姿が現れた。

それを幾度と無く繰り返す。

数分後、僕の周りを50羽を越える鋼の鳥が埋め尽くした。

「……散って」

僕のその言葉を待っていたかのように、鋼の鳥達がいつせいに四方八方へと飛び去る。

針金で構成された、簡易的な使い魔。

1体だけの使役なら初級の高位魔法だけど、これだけの数の一斉使役なら上級の最高位に位置する魔法だ。

その身に宿った魔力が尽きるまで、創り手の眼となり耳となり、時には刃になって使命を全うする存在。

だけど、この世界の“ろぼと”のような自我の無い物体でなく、

自らの自我をもった存在だ。

……欠点としては、長く共にいると愛着が湧いてしまい、破壊されたときに哀しくなってしまうことだ。

……………話を戻そう。

鳥達を見送った僕も再び空に上がり、この魔法の核を探す。

数分後、使い魔から僕の下へ術式の中心の発見を示す連絡が届いた。

その報告があつた地点に急行した僕の眼に飛び込んできたのは、樹の内に取り込まれた僕より少し年上らしい少年と少女。

少年の手には、青い宝石　ジュエルシールド　が鈍く光を放っている。

僕は鳥達に周辺の警戒を命じると、封印作業に移った。

その途中、僕の遙か後方で少女Aの魔力が溢れでたが、気にも留めずに作業を続行する。

ただでさえ、このよくわからない危険な宝石の封印作業中に、そんなどうでもいい存在に気を向ける余裕は無い。

僕の顔を、汗が一筋流れていく。



そして

「……封印、完了」

無事、宝石に封印を施すことに成功する。繊細という点を除けば、それほど難しくはない魔法だ。失敗などありえない。

僕は小さい皮袋を取り出すと、それに封印したジュエルシードを仕舞っておく。

いつの間にか停めていた息を吐き、身体を弛緩させた瞬間、使い魔から危険を知らせる警報が寄せられると同時に、その使い魔を含む幾匹が破壊される。

その使い魔たちを配置していた方角　僕の真後ろだ　へ振り向いた僕の視界は、……桃色の光に埋め尽くされていた。

「　　ッ!?」

反射的に展開した、本日二度目、無詠唱による『八天方陣』。無詠唱での魔法というのは、消費魔力が多いのだが、僕のこの判断は間違っていないと確信する。

桃色の光の奔流に耐え抜いた僕は、その攻撃が飛んできた方向を睨

む。

魔力から判断して、敵は少女Aであるのは間違いない。

「……敵対行為」

僕は……少女Aを敵と認定した。

「ユーノ、どいてそいつころせない」

「お、落ち着いて下さいジークさん!!」

僕は少女Aの命を摘み取る一歩手前で、立ちふさがったユーノに阻まれていた。

少女Aは口を開かない………というか話せる状態にない。

………だつて口からぶくぶく泡を吹いてるし、眼は白目をむいてる。

………明らかに意識がない。

どうしてこんな状況になったのか、順を追って思い返す。

少女Aを敵と認識した僕は、一瞬で距離を詰めた。

さらに一瞬で少女Aの背後に回ると、こちらに欠片も気付いていない少女Aの腕を取り、床に背中から叩きつけ、そのまま身動きが取れないように脚を使って手足を拘束。

空いた両手に拳銃を両手に持って、至近距離から顔面に射撃。

一発だけのつもりだったけど、少女の杖が自動で弾丸を防いでしまったので、腹いせに1弾倉×2（両手）を叩き込むもあえなく防がれてしまった。

対魔法障壁用の弾丸を作る暇が無かったことを悔やんだけど、どうしようもない。

この時点で少女Aは普通に恐怖で気絶。何の打撃も与えられなかったのは癪なので、僕が出せる限界の殺気を叩き込んだら、一瞬目を覚ました後、今度は泡を吹いて気絶した。

ちなみにこれはわずか3秒の出来事だ。

ようやくユーノが状況を把握して、少女Aから引き離されて今に至る。

「ごめんなさい！！ 僕がなのはきちんと注意をしなかったせいで危険に晒してしまい」

「ユーノ、ごめんで済んだら戦争は起こらない」

話しながらも、僕は間を空けることなく少女Aに濃密な本気の殺気をぶつけ続ける。

……僕の本気の殺気は、ドラ エのスライムの群れくらいなら瞬殺できる。

心臓の弱い人間なら、死ぬ。

現に、少女Aも気絶したまま体が痙攣しだしている。

どんなに強固な障壁だろうと、殺気を防げるわけもない。

「……ユーノ、もう一度言う、……」退くどくけ『「

僕はユーノにも殺気を向ける。

……さつきはユーノに『ころす』といったけど、デビッドさんの契約がある以上、少女Aを殺すわけにはいかない。

「ただ、この青い宝石　ジュエルシード　の戦いに介入させるわけにはいかない。」

「だから、肉体は殺さずに少女の心を恐怖で砕く。」

「しばらくの間、こんな場所にしゃしゃり出ようだなんて思えないほどに。」

「コレが危険なものとわかった以上、こんな初心者に任せてはおけない。」

「この少女は、僕の仕事の邪魔になり得る。」

「……なら、その不安の芽は摘み取っておく。」

「……退け……ません!!」

「ただ、殺気を受けて体を強ばらせながらも、ユーノはそう宣言した。」

「内心でその事に驚くけど、僕はそれを表には出さない。」

「……ただ、未だに握り慣れない両手のケンジユウをユーノに向けるだけだ。」

「そう、じゃあ仕方な　」

「なのはには指一本ふ　」

「辺りを漂う匂いに、今にも動き出そうとしていた僕たちの動きが止まる。」

御手洗いなど嗅ぐ、ツンと鼻を刺すような匂い。

ユーノと僕はお互いに目を見合わせ、同時に首を振る。

消去法で、匂いの発生源であろう少女Aに僕たちの視線が向けられ

「……………」

「なっ、なのはあ!?!」

少女Aは、気絶したまま大洪水　あえて正確な表現にしないのは、  
せめてもの慈悲だ　を引き起こしていた。

オロオロとろたえるユーノとは逆に、僕は少女Aから視線を逸ら  
してやる。

敵とは言え、そんな姿を見たら男としてダメだろう。

本気で殺気を向けていたけど……………まさか漏らすとは思わなかつ  
た…。

僕はため息を吐くとそんな一匹と一人に背を向ける。

「え!?!　ちょ!?!　ジークさん」

「……興を削がれた、帰る」

「とり合えずこの状況をどうにか」

「僕の仕事に“お漏らし少女”のお守りは入ってない」

……まあ、漏らすほどの恐怖を体験すれば、二度と戦おうとは思わないだろう。

そう言い捨てると、僕は継ぐすぐがるようなユーノの声を無視してその場を立ち去ったのだった。

「……ただいま」

時刻はすでに深夜。

あの後すぐに帰れば良かったのに、どんな顔をしてアリサに会えば解らなかつた僕は、飛行魔法を使わずにわざわざ徒歩で帰路に着いていた。

かなり距離があるとは言っても、大陸の端から端までの距離が有るはずもなく、遅かれ早かれ到着することは自明の理だった。

明日の朝、何食わぬ顔で食事の席にできればいいな。と僕は足音を殺して、真っ暗な自室に滑り込む。

まだ慣れていない部屋、手探りで照明のスイッチを探す。

パチリ

「……………ッ!？」

勝手に部屋の明かりが点いたせいで目がくらんだ。

眩しさから回復した目に飛び込んできたのは

「……………遅かったわね、ジーク」

アリサの……………姿だった。

「……………さて、ジーク。今の内に言うておきたいことは？」

「……………この座り方は、なんていう拷問？」

僕はアリサの威圧感に気おされて、ベッドに足を曲げた変な座りか



たで座らせられていた。

正面では僕と向かい合うようにアリサも同じ座り方で座ってる。

「ああ、それは“正座”って言って、この国の公の場の座り方だけ  
ど……慣れていない貴方には拷問になるわよね」

「……………」

説明はとても丁寧なのに、何ともいえない気配が滲み出ている……。

「……言いたいことは以上ね？ ……どうして今日の昼間、あんな  
ことしたの？」

「それは」

アリサの言葉に、僕の言葉は遮られる。

「……どうして私やパパや鮫島を逃がして、アンタも一緒に逃  
げないの？ 初めて会ったときも、今日も、危ないって解ってるの  
にどうして立ち向かうの？」

「アリサ、僕は ……ッ!？」

僕が口を開いた瞬間、いきなり立ち上がったアリサに押し倒される。  
不意を打たれたのと、痺れる足のせいでまったく反応できなかった。

僕の腰に跨ぐまたがくって動きを封じ、両手が僕の両手首を掴んで  
そのままベッドに組み敷かれる。

昼間、僕が少女Aにした格好に似てるけど、状況がまるで違う。

普段のように縛られていないアリサの長い髪が垂れ、幕のように僕たちを部屋から切り離し、僕とアリサ、二人だけの空間を作り出した。

「ジーク、私の魔法じゃジークを助けてあげられないの？……怖い、怖いよ……これからもこんな事があつた時、一人残つたジークが帰つてこなかったらと思つと……！」

アリサの瞳からこぼれた雫>しずく<が僕の頬に落ち、流れていく。その慟哭は、鋭い棘となつて僕を突き刺した。

「……ごめん、アリサ。心配かけた」

「……命令よ」

「……？」

「護衛対象の私の命令よ？ 聞けないの？」

「……依頼主はデビッドさんだけど、護衛対象からの命令なら聞いても大丈夫」

「そつ……」

小さくつぶやいたアリサから腕の力が抜け、彼女の身体>からだ<が薄い寝巻き越しに密着する。

「あ、アリサ？」

戸惑う僕を知つてか知らずか、アリサが僕の耳元に口を寄せた。

「……ジーク、私に力を……魔法を教えて」

「……今だって魔法は教えてるけ」

「ゴメン、言い方が悪かったわ。……ジーク、私に力を……どんな戦いでも貴方の隣に居られるような魔法を教えて……！」

……アリスの言葉に、僕は反射的に首を左右に振った。

「……アリスは解ってない。普通の魔法を教える分には僕も構わない、だけど戦いの魔法……しかも僕の隣で戦える位の力ってことは、戦いで、もしかしたら訓練の段階で死ぬかもしれないって事。……僕は護衛としてアリスを守らなきゃいけない、だから」

「護衛である以前に、あんたは私の友達でしょ！ 私は友達を危険に晒して、一人隠れてるなんてイヤなの！！」

「……友達？」

……鏡が無いから正確なことは言えないけど、きっと今の僕の顔はこの国で言う“鳩が豆鉄砲で撃たれたような”顔をしているに違いない。

……恥ずかしい話しかたけれど、僕は“友達”というものを概念でしか知らない。  
当然の事だとは思っ。

『王子』という立場上、同年代の子と触れ合う機会は無かった。

基本的に毎日が大人に混じつての勉強と剣技・魔法の訓練ばかり。実力を認められ、騎士に叙任されて戦いに出るようになってからは更に忙しくなつてそんな暇もない。

本を読んで“友達”という意味が解らなくて、周りの騎士の仲間達 皆僕より20歳は年上だ に聞いたら『お互いに信頼し隠し事などもしないような、好感を持てる間柄』って答えを貰った。

『……じゃあ皆は僕の友達？』

『……友達か……と言われれば“いいえ”です。私達はジークに友愛の情も信頼もありますが、それ以前に臣下として接さざるをえませんから』

『ですね。「友達」というよりは「戦友」……というか「部隊全体の弟」です。……俺じゃ歯が立たないくらい強いですけど』

『そうそう。どっちかってえとそっちだな、こんなむさ苦しい男どもに囲まれてたら難しいかもしれないが、何でも話し合える同じ年くらいの「友達」を作ってくださいな』

『……じゃあ“友達”ってどうやって作るの？』

『どう作るの？……と言われましても、料理みたいにレシピがあるわけじゃないですからねえ……』

『自分も意識して友達を作った覚えは無いですね。いつの間にか友達になつていた……という感じです』

こんなのが、僕と騎士達の間でずっと昔に交わされた会話だ。

僕はその言葉が信じられず、アリサに聞き返す。

「…アリサは僕を“友達”って思ってくれるの？」

「当然でしょ！一緒にご飯食べて、遊んで、勉強して！これで『友達じゃない』とか言ったら殴るわよ！？」

ものすごい剣幕で、アリサが僕を怒鳴りつける。

そんな風は大真面目に怒るアリサを見て、……僕はこんな状況  
いまさらだけどベッドに押し倒されてるんだよね、僕 なのに無  
性に可笑しくなって笑いだしてしまった。

「……あは、あはははっ」

「ちょ！？何が可笑しいのよ！？私何か変なこと言った！？」

いきなり笑い出した僕に、アリサは顔を紅くして困惑と怒りが入り  
混じった表情を浮かべている。

……うん、当然の事だと思う。

僕だって、真面目な話しをしているのに、相手がいきなり笑い出し  
たらそんな風になるだろうし。

そんなアリサの間を突いて僕は体を起こし、組み敷かれていた状態  
からきちんと目の高さをあわせた。

そしてそのまま笑いながら、アリサに正面から抱きつく。

「え！？ちょ！？ジーク、私まだ心の準備がッ……！？」

アリサが混乱して何か喚んでいるけど、そんなことを気にする余裕  
は今の僕には無かった。

ああ、友達を作るのってこんなにも簡単なことだったんだ。

“故郷”を失くして、それと一緒に同じ部隊の騎士“仲間”を亡くして、何もかも無くして独りでセカイを飛び出したのに、遠く離れたこのセカイで作り方も分からなかった“友達”が出来た。

……こんなに不思議なことは無い。

しばらく笑い続けようやく笑いが収まった僕は、途中から僕の笑いを止めることを諦めたらしいアリサに話しかける。  
無論、抱きついたままだ。

「……アリサは僕の友達で、アリサにとって僕は護衛である前に友達……でいいんだね？」

「……ようやく笑い止んだと思ったら、言いたいことはそれだけ？ ……そうよ、それで合ってるわ」

顔は見れないけど、呆れた声でアリサが僕に告げる。

「……ん、わかった。アリサは僕の友達で、僕はアリサの友達。……これからは、“アリサの護衛”の仕事としてじゃなく“アリサの友達”として、義務とかそういうこと関係なくアリサに魔法を教えるし、実力が伴えば仲間はずれにしない」

「……そ、もつと洩られるかと思ってたわ、……ありがと。でもいいの？ 頼んだ私が言うのもなんだけど、ジークの敵って危ないんでしょ？ ジークがパパに怒られちゃわない？ 『アリサを戦いに巻き込むな』って」

「それは、大丈夫」

アリサを抱きしめていた腕から開放して正面から向き合い、恐らく故郷を離れてから初めて、心からの笑顔で告げた。

「もうこれ以上何も失くしたくないから。初めてできた“友達”のアリサを護ってみせるから」

アリサは、紅い顔で百面相をしているみたいに表情を様々に変えながらそんな僕の言葉を聞いて

「……………うん。……………これからよろしく、ジーク」

今日一番の顔の紅さで俯いたまま、そうつぶやき返してくれたのだった。

これがきつと、僕がこのセカイに“意味”を抱いた瞬間だったのだと、ずっと後になってから思うようになったのだった。





11：敵性存在&失くしたモノと、手に入れたモノ（後書き）

この作品の「高町なのは」の扱いは、しばらく「可哀そつな子」になつてしまいそうです……

## 12：魔法使いの杖（前書き）

かなり短いですが、ここで切らないとキリが悪くなってしまいそうなので上げさせてもらいます。

## 12：魔法使いの杖

12：魔法使いの杖

カチャカチャ、カチャカチャカチャ

アリスが学校に行ってる間、僕は部屋に籠もり、ちょっとした工作を行なっていた。

朝から始めたのに、もう日は傾いて部屋の中を茜色に染めている。

カチャカチャ、カチャカチャカチャ……パチリ

「……ひとまずは、完成」

自分で引いた図面と見比べて、誤差が無いか綿密に確認を繰り返す。

……うん、我ながらいい仕事。

これで“外枠”は完成、後はコレに“力”を込めるだけ。

僕は懐から拳を縦に二つ重ねたくらいの大きさの水晶と、ナイフを取り出す。

水晶を机に固定して、動かないことを確認すると、ナイフを手首に当てる。

そして

「…えい」

…一思いにナイフを一閃した。

「わととと……」

僕は傷口から勢いよくあふれ出た血を顔に跳ねさせながら、水晶に掛けていく。

水晶と血が触れた場所が、ほのかに光を発した後に血を吸って紅く染まっていく。

「……こんなものかな？」

水晶が血を限界まで吸ったことを確認すると、僕は傷口を舐めて血を止める。

同時に、部屋の扉が開かれて、学校から帰ってきたアリサが顔をのぞかせ

「ただいま……ってあなたは部屋で何をやってるのッ!? 何でアンの周囲3メートルが殺人現場みたいにスプラッタな状況になってるのよ!? そこに正座して何やってたか話さない!!」

「……血溜まりに正座するの?」

流石にそれは、僕としてもご遠慮願いたいよ?

「~~~~ッ! ああもう! 血は止まってるみたいだから、お風呂に行つてさっさとその血を流してきなさい!! 話はその後で聞くから!」

「ん。分かった、入ってくる」

確かに血は乾くと、こびり付いて落ちにくくなるから

「ちゃんと血をキレイに流してくるのよ! (……まったく、いきなり見たとき私がどれだけ心配したかも知らないで……)」

「うん? 最後に何か言った?」

「言っていないわよッ! いいからさっさと入ってきなさい!」

これ以上怒鳴られないために、僕はそそくさと部屋を後にするのだ  
った。

「……で、何をしてたのか正直に話してもらつわよ?」

「アリサにプレゼントを作ってた」

お風呂上がり、ホカホカ気分のまま正座で尋問される僕……“しゅーる”だ。

僕は今日1日掛けて組み上げたモノをアリサに差し出した。

「……これ……『杖』？」

「そう」

僕が差し出したのは、アリサの身長より長い金属製の杖。

さっき僕の血で赤く染めた水晶は、その先端に取り付けてある。

僕が使うんだったら装飾なんて付けないけど、女の子のアリサのために装飾をつけて見栄えをよくしておいた。

「綺麗な杖……でも、何で今更？ 魔法の訓練を始めたときには渡してくれなかったのに」

「本気で僕と一緒に戦いに出るとしたら、アリサじゃ足手まとい。それを補うには、いい武器で底上げするしかないから」

……あーるぴーじー 当然だけど“携行型対戦車砲”じゃないと同じだ。

レベルも上げずにボスと戦うには、強い武器を手に入れるしかない。

「ふん。……でもソレとさっきのリストカット……手首を切つた事は何の関係があるのよ？」

……？ ……ああ、そつか。この世界には魔法が存在しないから、  
分からないのか。

「……あれは、杖の材料として、血が必要だったから。魔術師の髪  
や血には魔力が宿る、魔法関係の武器や防具を作るときに血は比較  
的『ぽびゅー』な材料」

「へへ、ファンタジー物の小説なんかでもそういうのがあったりす  
るけど、ホンモノがというと説得力があるわね」

「試しに持ってみて。……けっこう自信作」

久しぶりに作ってみたけど、腕が鈍ってなくてよかった。

「あれ？ 意外と軽いのね？ この杖、綺麗だけどゴツいから結構  
重そうなのに……」

「ん。鮫島に頼んで買ってきてもらった金属パイプとかを材料に『  
軽化』と『強化』の魔法を重ねがけして部品を作った後、溶接の魔  
法で杖の形に組んで、最後に先端に水晶を付けて完成。……材料た  
ったの2980円」

#### 材料内訳

ステンレスのパイプ ほかむせんたーで購入  
各部金属パーツ 同上  
水晶 手持ちの材料

#### 作り方

- 1 ・完成像を思い浮かべます
- 2 ・パーツを力技　筋力強化の魔法　で“くにゃ”っと好みの形に加工します。
- 3 ・パーツに『軽化』・『強化』の魔法を“これでもか!”というほど重ねがけ。
- 4 ・溶接の魔法でパーツをくっ付けて、外郭は完成
- 5 ・ナイフと、水晶を手元に用意します。
- 6 ・ナイフを手首に添えて“すぱあっ”っと切ります。  
(　注意1　躊躇うと逆に危ないので一気に行きましょう)  
(　注意2　止血できる準備をしておきましょう、失敗しても責任は取れません)
- 7 ・血が新鮮なうちに水晶に掛けます。
- 8 ・紅水晶が完成したら止血し、水晶についた余分な血を落とします。
- 9 ・紅水晶を4で完成した外郭と組み合わせたら完成です。

「安っ!?!　下手したらお昼のショッピング番組の商品より安いわね!?!　……そんな材料でいい杖なんて出来るの?」

……うん、普通の魔術師が作ったんだっただけだね

「ゲームで例えるなら、クリア後に手に入るオマケ武装並みにいい杖だよ?」

杖の核が……もとい血の格が違うから。



「何そのチート武器!？」

アリサが唾然とした表情で僕を見ている。

……ちよっと、恥ずかしい。

「僕の血を材料に作ったんだからコレくらい当然。……僕の血をコップ1杯売れば10年は遊んで暮らせるから」

僕は控えめに胸を張って自慢する。

この体に流れている妖精の血は、それくらいの価値がある。

元いた世界で僕を追っていた人間の中には、僕を生け捕りにして一儲けしようという集団だっていたんだから。

そんなことを思い出しながらも、表情には浮かべない。

「うわぁ……スゴイのねこの杖。……でもいいの? そんな貴重な杖を貰っちゃって」

……価値を知って怖気づいたのか、腰が引けているアリサの姿を見て楽しんでなんか無いよ?

「構わない。アリサは友達、だから対価は要らない」

僕はアリサに杖を押し付けた。

僕には無用の長物、殴るくらいにしか用途が無い。

ちよっと躊躇うそぶりを見せたけど、アリサは一度頭を振るとそれを受け取った。

「ありがたく使わせてもらっわ」

「それでいい」

これがいま僕に打てる最高の手段。

後は、僕がどれだけ上手に“闘い方”に教えられるかと、アリサの努力しだい。

本当は、一ヶ月くらい掛けて基礎から鍛え上げたいけど、いつ次の事件が起こるかわからない以上しょうがない。

「後でアリサの戦装束を作るから、それが終わったら技術や理論を後回しにして戦闘訓練を始める。1週間でとり合えず戦いに出せるくらいには鍛えるつもりだから、覚悟して」

臨<のぞくんで欲しい。

そう繋げようとした僕を、アリサの言葉が停めた。

「5日よ、どんなに厳しくてもいいから5日で教えて。」

「いや、それは………わかった」

………もちろん最初は止めるつもりだった。

………けど、アリサの目を見てやめた。

あの目に宿ってる意思の光は、ホンモノだ。

その意思を頭ごなしに止められるはずも無い。

「明日から5日間、習い事やお稽古は全て断つて。学校から寄り道しないで帰ってくることで、……それが5日で教える条件」

「わかったわ、明日からヨロシクね。……『センセイ』って呼んだほうがいいかしら？」

「……『師匠>マスター<』の方が好み」

……取り急ぎ、明日からの練習のため今日は徹夜で針仕事  
アリサの戦装束造り に打ち込む必要があるそうだった。

## 12：魔法使いの杖（後書き）

さて……アリスをどれだけ強くしてみたものか…。

戦闘スタイルやら何やらは、まだ思案中です。

何かアイディアのある方はどうぞ（笑）

……とりあえず、序盤 大樹戦〜海上決戦まで  
倒できるくらいにしてみましたか？

の少女Aを<sup>なのは</sup>圧

では、また次回にお会いしましょう。

13 : 幕間 戻らぬ過去 (前書き)

少し趣向を変え、「幕間」という形で主人公の過去を書いてみました。

13：幕間 戻らぬ過去

幕間 戻らぬ過去

城内の中庭に僕のおきれた声が響く。

城……と言っても、物語に出てくるような高い石造りの城ではなく、周囲を壁で囲んでいる巨大な邸宅っていうのが正しい表現だと思う。もともと街の周囲は見上げると首が痛くなるほど高い城壁で囲まれている。

つまりはこの街そのものが巨大な城のようなもので、差し詰めこの屋敷は城で言う“本丸”みたいな物だ。

……話しを戻そう。

僕の目の前に居る細身で長身、藍色の短髪の掴みどころの無い男……彼が僕の師匠の『レンフィールド・フォン・メイザース』だ。

「……師匠、訓練の前に酒を馬鹿飲みするのは愚かだと思えます」

僕は訓練用に刃引きされた剣を腰に下げたままため息を吐いた。

刃引きされた剣による訓練とはいえ金属の塊ではあるから、斬りつけられたら間違いなく骨折する。  
だから、僕も師匠も得物以外は完全な戦装束。

僕は魔鋼金属製の肩当て・胸甲・腰当て・手甲、武装は片手用長剣と魔鋼金属製の盾、後は体の各部に小刀が備えられている。

対して師匠は龍革製の革鎧一式。武装は愛用する片刃の双剣『紅空』  
『べにぞら』『蒼天』『そうてん』の刃引きされた影打ちのみ。

……後は、手に持っている安酒の酒瓶だろうか。  
あの大きさの瓶なら充分鈍器になる。

……話を戻そう。

「我が弟子ジークよ、甘いな……。少し酒が入った方が動きにキレが出るって　　うえっぶ」

……飲みすぎて吐きかけているこの人間がこの国、それどころかこの大陸最強の剣士だとはとても見えない。  
この酒癖の悪さが無ければ非の打ち所のない人なのに……。

「どうします？　酔いが醒めるのを待ちますか？」

「…うんにゃ、剣を振るってた方が気が紛れる」

師匠がふらつきながらも立ち上がる。

「本当に大丈夫ですか？」

「…大丈夫だ。酔いの醒めるような鮮烈な攻撃を頼」

話しが終わる前に距離を詰めて抜剣、首筋に向け本気で振るってみた。

しかしその一撃は師匠が抜いた剣に迎撃されて不発に終わる。

「ちょ！？ おま！？ 万が一止め損ねたらどーするんだよ！？」

「……不意を打ったのに“万が一”なんですね、僕の攻撃が師匠に通るのは」

「……僕と師匠とのこの理不尽なまでの力の差は何なんだろう？  
僕は師との差にため息を吐くしかない。」

「うんにゃ、並の奴なら剣の柄を握った瞬間にソイツのクビが飛んでるからな。お前さんは充分一流だよ」

「……それは、褒めてるんですか？」

「おっ」

「……………」

「……正直に言う、そこまで認められようと師匠に勝てるとは全く思えない。」

そんな思いが顔に出たのか、師匠が苦笑いを浮かべた。

「やれやれ、将来はこの国を背負って立つご身分 王子様 な



のに何処まで剣の高みに至ろうとするんだか……」

「……この街くと市民こくみんを守れるくらいの高みまで」

僕の答えを聞いた師匠が呆れた表情で、僕の頭を小突く。

「戦いは大人に任せて、年相応に遊んだらどうだ？」

「“年相応”って言われても、周りは年上ばかりですから」

「……それが最大の問題だよなあ」

師匠がため息を吐くけれど、僕は剣の修行が楽しいから別に気にならない。

「……それより師匠は早くお相手を見つけたらいかがですか？ 身を落착けるとお父君から急かされているのでしょう？」

「余計なお世話だ！ 俺だってその気になりゃあオナナの一人や二人……簡単に……簡単に……簡単に……」

「……」

「……」

えもいわれぬ沈黙が僕たちの間に落ちた。

「……良いんだ良いんだ！ 俺は酒と添い遂げるんだ!!」

「……すみません、謝りますから拗ねないでください」

？んだけれってなければいい男なんだろうけど、いつもこんなだから……深く語らないであげるべきだろう。

「……………ええい！ どうしてこんな話題になった！？ 訓練だ！ 訓練を開始する！！ 使用可能なものは、己の体と両の手の武器と剣技のみイ！！」

「……………ん。わかりました」

「準備はいいな？ じゃあ始めエ！！」

「……………ッ！！」

雷>イカズチ<の如く斬り込んできた師匠の双剣を、左手に持つ盾で受け止める。

けど、勢いを殺すことが出来ず、腕1本分ほど後退させられた。

僕は魔法で自分の筋力を強化して戦っているが、筋力強化の魔法すら師匠は純然たる生身。

本来なら拮抗するはずも無いんだけど、師匠は拮抗どころか軽くソレを凌駕してくる。

……………ああ、なんて理不尽な。

心の中でそう呻いた刹那、師匠と僕の視線が交差した。

「フツ……！」

一気に左腕に力を込めて双剣を上弾くと、その勢いそのまま独楽コマくのように1回転して、がら空きになった師匠の胴体に剣を振るう。

双剣が弾かれた瞬間に師匠が全力で後ろに飛ぶが、それは読み通り。読んだ上で、ただ普通の一閃を放つはずが無い。

「…アルカディア騎士団流魔法剣闘術の型、『烈斬』」

僕の剣の斬線に沿って、魔力で編まれた刃が飛ぶ。

風を斬り裂き高速で駆ける魔法刃が、狙いを違へたがくわず着弾する寸前、後退し地に足を着いた師匠がそれを迎撃した。

「ハッ！ 我流剣技『朧霞』おぼろがすみく！」

双剣が目にも止まらぬ速さで縦横無尽に幾重にも奔った。ガガガガッという音が刃から響き、魔力刃が粉々になって四散する。

「……非常識にも程があります」

普通、魔力刃に対抗するには障壁で受け止めるか、同じく魔力刃で相殺するのが一般的で、何の加工も施されていない純粋な金属剣でいとも簡単に魔力刃を破壊できるのは、世界広しと言えども師匠以外に存在しない。

“一点への瞬時多重斬撃”……師匠が行なっているのはそういう行為だ。

魔力刃という存在は、結合した魔力の集合体……みたいなもの。

師匠がやってみせたのはその魔力結合の一点を破壊することで、魔力刃の構造を連鎖的に破壊している……言葉にすればこれだけだけ、実行するのは至難の業だ。

……さすが、“剣爛武踏”の二つ名は伊達じゃない。

これが戦だとこの剣技に加えて、浮遊魔法によって浮かべられた無数の剣が全方位からそれぞれが意思を持ったみたいに飛んでくるんだから、想像しただけでゾツとする。

「ほらほらまだまだア！それで仕舞いか！？」

「……まだまだ、訓練は始まったばかり」

さらりと言い放つと、僕は剣を握りなおす。

次の瞬間、高速移動技法“瞬動”で師匠に肉薄すると、僕は再び剣戟を開始した。

そして

「 師匠はホントに純粋な人間なんですか？」

現在、試合の反省会の真つ最中。

……うん、もちろん負けたよ？

“ はふはふちゆるちゆる ” と、初めて食べる目の前のものに息を吹きかけ冷まして口に運びながら、僕は師匠に問いかける。

「む、失敬な。お前と違って、俺は純粋な人間だぜ？」

いかにも『心外だ』という表情を浮かべる師匠。

「亜人種……特に蜥蜴人系の血を引いてたりはしません？」

「んなわけないだろ、俺の体の何処にウロコがあるよ？」

「……確かにウロコは無いですけど。……じゃああの訓練中のアレは一体どうやって？」

「ん？ 俺何か変なことしたっけ？」

……本当に心当たりが無いらしい。

僕は意を決して口を開いた。

「普通の人間は、壁を走れないです！」

今日、僕の“師匠の信じられない行動烈伝”に新たな伝説が刻まれていた。

それは訓練の途中、僕に中庭の片隅にまで追い詰められた師匠は、中庭の壁を走って逃げると言う奇想天外な行動だ。

真剣な僕に対し、師匠は“ずぞぞぞぞ”と凄まじい音と共に目の前のお椀の中身を口の中へと消していきつつ答えた。

……というか僕と同じものを食べているはずなのに、どうしてここまで音が違うんだろっ？

「あ？ あれか？ あれは、ほら、アレだよ……勢い？」

「……………」

「……………いや、仮にも師匠をそんな胡乱な目で見るなよ。ホントだって、勢いつけて走れば出来るんだよ!？」

「僕だって中庭の壁の一面くらいなら出来ますよ？ でも師匠は中庭の壁を延々とぐるぐる走れるじゃないですか、もっと言えさつき走って城壁乗り越えたじゃないですか……非常識極まりないです」

「……………ああ、そっぴやこのメシはどうだ？ 東方の国の料理で“うどん”とか言うらしいぞ？」

形勢不利を悟ったらしい師匠があからさまな話題転換を行なった。ここで師匠の傷口をえぐるように追撃を加えるほど僕は残酷じゃない。

「はい、つるつるしてて食べにくいですが美味しいです」

今更だけど、僕たちは城の外の『屋台広場』と呼ばれる所に居た。この広場は名前の通り、小さな飲食店が軒を連ねている一角だ。

店を持つほど資金が無い人々や、流れの料理人などが屋台を借りて店を出している。

『ここにすれば大陸中の料理が食べられる』…そういう話しがまことしやかに囁かれているけど、あながち間違いじゃない。

交易都市でも有る此処は各地の食材も集まってくるから、誰がどんな材料を求めようと大抵が対応できる。

料理人にとっては夢の如き環境だとも言われているが、あいにく僕はその辺りに詳しくないからなんとも言えないけど……。

「他の騎士連中が話してるのを聞いてな、一度行ってみようと思っただんだが…当たり前だったな」

話しながらも、お椀の中のつゆを一息で飲み干した師匠が“ふう〜”と一息ついた。

すっかりくつろぎ体制に移行した師匠を横目に僕はあくまで自分の速度で食べ進め、少し遅れて完食する。

そして、重大な事態が現在進行形で進んでいることを突きつけた。

「師匠、僕を城から連れ出すこと……許可取りましたか？」

「……………ヤベエ」

師匠の頬に冷や汗が流れた。

「というかそれ以前に『メシだ、メシに行くぞ！ 最短距離でな！』  
って言いながら僕を担いで城壁駆け上って城から出ましたけど、事  
情を知らない人が見たら、城から誰かを担いで逃亡した怪しい人間  
ですし」

心なしか、雑踏にまぎれて僕を探す仲間の騎士たちの聞こえてくる。  
同時にそれに比例するように師匠の顔色が青くなってきた。

「……………ふ、酔った勢いってのは恐ろしいぜ！」

「何でも酒のせいになればいいってもんじゃないですけど？」

爽やかに笑って誤魔化そうとする師匠を、僕は笑顔で追及する。

…間違っても負けた腹いせなどではない、断じて違う。

そうこうしているうちに、明らかに僕を探している声が聞こえてき  
た。

「……………さて、ジーク、……………食後ではあるが帰りは城まで競争だ！  
今ならまだ誤魔化せる！」

「手遅れだと思えますけど……………」

うどんの代金を払う師匠を待つ間、軽く筋肉を解す。

「まだ間に合う！ ……というか間に合わないと俺の給料が減らされる



！ 経路は自由、追っ手の騎士に捕まったら無条件で負けだ！ それでいいな！？」

「はい、了解です」

あたふたとしている師匠とは対照的に、僕は静かに競争の開始を待つ。

そして

「位置について」

「よい」

僕と師匠の声が重なる。

「」「ドン！」「」

僕たちは、城へと向けて駆け出した。

…この一ヶ月後、街が滅び、この日常が二度と見られなくなると思っていなかった。

……思えるはずも、無かった。

……これは僕の取り戻せない、遥か遠くの故郷での、大切な、……大切な思い出。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2647r/>

---

魔法少女リリカルなのは ~若草色の妖精~

2011年9月28日18時49分発行